1. 開催概要

（1）名称

東アジアにおける理想郷と庭園に関する国際研究会

（2）開催趣旨

奈良文化財研究所では、中期計画に示された古代都城遺跡に関連する庭園の調査研究において、平成13年度(FY2001)以来『古代庭園に関する調査研究会』を開催してきた。現在、第Ⅱ期として平安時代(8世紀末～12世紀末)を中心とした庭園をテーマとしており、平成18年度(FY2006)から、宮廷の庭園、貴族邸宅の庭園などについて検討してきた。

平安時代の庭園を考える上で検討するべき重要な課題のうちでも、日本において11世紀から14世紀にかけて特異的に造営された「浄土庭園」の本質を見極めることが重要である。そして、その系譜を検討するためには、中国大陸及び朝鮮半島を通じてもたらされた理想郷の思想と庭園の空間構成、そして、それらが日本における浄土庭園の成立と発展に与えた影響、あるいは、中国大陸や朝鮮半島における表現の類似点や相違点などについて検討することが不可欠である。

一方、日本を代表する浄土庭園である平等院庭園(世界文化遺産「古都京都の文化財(京都市・宇治市・大津市)」の構成資産)や、「平泉の文化遺産」(日本の世界遺産暫定一覧表登載資産の一つ)の傑出した浄土庭園群など、検討の中心となるべき事例は世界遺産の取組とも関連が深い。

そのため、平成21年度(FY2009)の『古代庭園に関する調査研究会』においては、文化庁と協力・連携し、日本国内のみならず中国・韓国からも建築史・庭園史の専門家を招いて、理想郷と庭園の系譜・特質を検討し、それぞれの事例の比較研究を通じて、日本の浄土庭園の本質、あるいは、その極致とも言うべき「平泉の浄土庭園群」の世界的見地からの価値などについて検討を行う。

（3）主催

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所、文化庁

（4）開催期日

平成21年(2009)5月19日(火)から5月21日(木)の3日間

（5）開催場所

平城宮跡資料館　小講堂　(奈良県奈良市佐紀町)

（6）開催日程

平成21年5月19日（火）10:00 ～ 17:45

午前：（1）開会挨拶　田辺　征夫　（奈良文化財研究所長）
（2）出席者紹介・日程等説明　［事務局］
（3）開催趣旨等　小野　健吉　（奈良文化財研究所文化遺産部長）
（4）問題提起　田中　哲雄　（議長）
（5）講演Ⅰ　本中　眞　「理想郷」としての日本庭園の意匠と技術
（6）コメントⅠ　尼崎　博正
（7）質疑応答Ⅰ

昼食・休憩等　12:05 ～ 13:30

午後：（8）報告Ⅰ　杉本　宏　宇治に築かれた西方浄土への憧れ　～平等院庭園～
（9）報告Ⅱ　佐藤　嘉広　奥州に夢見た理想郷と庭園群　～平泉の浄土庭園群～
（10）コメントⅡ　仲　隆裕
（11）質疑応答Ⅱ
準備・休憩等　14:45 ～ 14:55
（12）講演Ⅱ　呂　舟　古代中国における庭園の発展および浄土と浄土庭園
（13）質疑応答Ⅲ
準備・休憩等　16:15 ～ 16:25
（14）講演Ⅲ　洪　光杓　楽園を象徴する韓国の古庭園、雁鴨池庭園
（15）質疑応答Ⅳ

レセプション　16:15 ～ 16:25

平成21年5月20日（水）9:30 ～ 16:30

午前：（16）講演Ⅳ　田中　淡　中国庭園の初期的風格と日本古代庭園
（17）質疑応答Ⅴ
準備・休憩等　10:30 ～ 10:50
（18）討論Ⅰ
昼食・休憩等　12:50 ～ 14:30
午後：（19）討論Ⅱ

平成21年5月21日（木）14:00 ～ 16:00

午後：（20）討論Ⅲ
（21）閉会挨拶　小野　健吉　（奈良文化財研究所文化遺産部長）

2. 出席者

(1) 円卓

田中　哲雄（議長：前・東北芸術工科大学教授）［日本庭園史・遺跡庭園・遺跡整備］
田中　　淡（副議長：京都大学人文科学研究所教授）［中国建築史・中国庭園史］
本中　　眞（文化庁記念物課主任文化財調査官）［日本庭園史］
呂　　舟（Dr. Lu Zhou ／中華人民共和國・清華大學教授）［中国建築史］
洪　　光杓（Dr. Hong, Kwang-Pyo ／大韓民國・東國大學校教授）［韓国庭園史］
尼崎　博正（京都造形芸術大学教授／日本庭園・歴史遺産研究センター長）［日本庭園史］
仲　　隆裕（京都造形芸術大学教授）［日本庭園史］
小野　健吉（奈良文化財研究所文化遺産部長）［日本庭園史］

(2) 情報提供者

杉本　　宏（宇治市歴史まちづくり推進課文化財保護係長）［日本考古学・遺跡庭園］
佐藤　嘉広（岩手県教育委員会生涯学習文化課主任主査）［日本考古学］

(3) 文化庁

三谷　卓也（文化庁文化財部記念物課世界文化遺産室長）

(4) 日本イコモス国内委員会

杉尾伸太郎（日本イコモス国内委員会副委員長）

(5) 岩手県、「平泉」関係者等

大矢　邦宣（盛岡大学教授）
工藤　雅樹（福島大学名誉教授）
前川　佳代（奈良女子大学博士研究員）
藤里　明久（毛越寺執事長）
中村　英俊（岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課文化財世界遺産課長）
佐藤　淳一（岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課世界遺産担当文化財専門員）
櫻井　友梓（岩手県教育委員会平泉遺跡群調査事務所柳之御所担当文化財調査員）
千葉　信胤（平泉町世界遺産推進室室長補佐）
大野　　渉（プレック研究所文化財保護研究センター次長）

(6) 事務局及び所長他、奈良文化財研究所の研究職員等

事務局：文化遺産部
　平澤　　毅（遺跡整備研究室長）
　粟野　　隆（遺跡整備研究室研究員）
　清水　重敦（景観研究室長）
　惠谷　浩子（景観研究室研究員）
田辺　征夫（奈良文化財研究研究所長）
肥塚　隆保（奈良文化財研究研究所副所長／企画調整部長）
高瀬　要一（文化遺産部客員研究員）
島田　敏男（文化遺産部建造物研究室長）
吉川　　聡（文化遺産部歴史研究室長）
高橋知奈津（都城発掘調査部遺構研究室研究員）
今井　晃樹（都城発掘調査部主任研究員）
丹羽　崇史（企画調整部展示企画室研究員）
高田　貫太（都城発掘調査部考古第三研究室研究員）
青木　　敬（都城発掘調査部考古第一研究室研究員）

(7) 通訳

株式会社コングレ

3. 開会・質疑応答・討論・閉会の記録

1. 開会（平成21年5月19日）……112

2. 質疑応答（平成21年5月19日及び20日）……119
- ● 本中眞氏の講演及び尼崎博正氏のコメントに対する質疑応答 ……119
- ● 杉本宏氏及び佐藤嘉広氏の報告並びに仲隆裕氏のコメントに対する質疑応答 ……120
- ● 呂舟氏の講演に対する質疑応答……122
- ● 洪光杓氏の講演に対する質疑応答……123
- ● 田中淡氏の講演に対する質疑応答……125

3. 討論－１（平成21年5月20日）……127
- ■ 庭園文化の基層を成す人と自然の関わり ……127
- ■ 庭園文化の伝播と発展 ……130
- ■ 東アジアにおける庭園の表現 ……131

4. 討論－２（平成21年5月20日）……135
- ■ 東アジアの庭園における池の意味……135
- ■ 浄土の画像における池 ……138
- ■ 浄土庭園における池と堂舎の関係……140
- ■ 日本に展開した浄土庭園の特異性・希少性 ……142
- ■ 平泉の浄土庭園群の代表性・典型性……144

5. 討論－３（平成21年5月21日）……146
- ■ 結論文案に関する説明 ……146
- ■ 結論に関する議論……148
- ■ 最終コメント ……154

6. 閉会（平成21年5月21日）……155

「東アジアにおける理想郷と庭園に関する国際研究会」の記録

平成21年5月19日（火）～ 21日（木）

1. 開会（5月19日）

【平澤】 皆様、おはようございます。

本日は公私ご多忙の中、また遠路はるばるお越しいただきまして、まことにありがとうございます。ただいまより、『東アジアにおける理想郷と庭園に関する国際研究会』を開催いたします。

はじめに、当研究所の所長、田辺征夫から歓迎と開会のご挨拶を申し上げます。

【田辺】 本日は『東アジアにおける理想郷と庭園に関する国際研究会』のご案内を差し上げましたところ、基調報告をいただく先生、事例報告をいただく先生はじめ、多数の関係者の方、大変ご多忙の中お集まりいただきまして、ありがとうございます。とりわけ、中国からは清華大学の呂舟先生、それから韓国からは東國大學校の洪光杓先生、大変遠いところおいでいただきましたこと、厚く御礼申し上げます。

私どもの奈良文化財研究所では、平成13年度（FY2001）から『古代庭園に関する調査研究』を継続して行っています。この調査研究においては、日本において庭園の源流を示す遺構が窺われる古墳時代の事例などから検討を始め、先史の縄文時代、弥生時代、飛鳥時代、奈良時代と時代を下って研究を進めてきております。その一貫として、いよいよこの日本庭園史の中で非常に重要な位置を占める「浄土庭園」について検討する段階になりました。

「浄土庭園」は、浄土世界の表現を企図した浄土式伽藍を有する庭園で、9世紀の平安時代から12世紀の鎌倉時代にかけて数多くつくられました。この度、その代表的な事例である宇治の平等院や平泉の無量光院、毛越寺など、日本における世界遺産の取組とも関連が深いことから、文化庁との共催でこの国際研究会を開催することとなったわけです。

この「浄土庭園」は、日本庭園史の中で非常に大きな位置を占めておりまして、京都をはじめ、平泉、鎌倉に、日本庭園としても幾つかの傑出した事例が見られますので、日本人にはすぐに頭の中に浮かびますし、その大切さというのはとても直感的に理解されるものです。しかし、こういったことを世界の方々にご理解いただくのはなかなか難しいという側面もあって、東アジアを中心とした世界史的な観点の中でこの「浄土庭園」がどのように理解され、位置づけられるのかということについて、中国、韓国からの専門家も交え、日本国内から庭園の研究を専門とされている先生方にお集まりいただいて、そうした議論を十分に深めるというのが、この研究会の最大の趣旨と考えます。

私も若い頃から、京都の庭園が好きで、しばしば見に行ったりしていますので、庭園といえば、いわゆる浄土庭園的なものも普段から頭の中にありました。そのような庭園にも関連して最近少し気になっておりますのが、ここ奈良の平城宮東院庭園の東側に法華寺の「阿弥陀浄土院」の存在です。すなわち、奈良時代の天平宝字5年（761）につくられたこの「阿弥陀浄土院」にも庭園遺構が確認されていますが、そのような庭園がこの「浄土庭園」の文脈の中でどのような関係を有するかということです。そのようなことからも、この奈良文化財研究所において、「浄土庭園」に関連する検討が深められるのは大変意義深いことと思います。

最近、発掘調査によって、唐長安城大明宮の苑池であっ

た中国西安市太液池、あるいは、韓国慶州市龍江洞苑池など、東アジアにおける古代庭園の重要な事例が発見され、調査研究が進められています。奈良文化財研究所では、この十数年来、中国社会科学院考古研究所や国立慶州文化財研究所などとの共同調査研究を進めてきております。そのような取組とも関連して、また、近年の中国や韓国における古代庭園遺構の極めて重要な調査成果を踏まえ、平成17年(2005)には当研究所の飛鳥資料館において特別展『東アジアの古代苑池』を開催いたしました。

そうしたことも含め、庭園の歴史を通じた中国、韓国、日本との繋がりを検討することは大変興味深く、この機会に一層議論を深めていただければ大変ありがたく思います。

【平澤】 次に、ご講演、ご報告等のためにご出席いただいております先生方のご紹介をしたいと存じます。今回の国際研究会において、ご講演、ご報告いただく先生方をはじめとして、円卓会議の形式をとらせていただいています。議長から順次ご紹介してまいりたいと思います。

初めに、この研究会の議長を務めていただきます、田中哲雄先生です。田中哲雄先生は、日本庭園史のほか、遺跡庭園、遺跡整備をご専門とされ、当研究所の改組前の奈良国立文化財研究所の研究員、それから文化庁記念物課の主任文化財調査官などを経まして、この3月まで東北芸術工科大学の教授でいらっしゃいました。著書等に『発掘された庭園』『庭園と茶室』、『城の石垣と堀』、『古代庭園の立地と意匠』などがございます。どうぞよろしくお願いいたします。

次に、副議長を務めていただきます田中淡先生です。田中淡先生は、中国建築史、中国庭園史、中国技術史をご専門とされ、文化庁文化財保護部建造物課文部技官、中国南京工学院建築研究所客員研究員などを経られまして、現在、京都大学人文科学研究所の教授でいらっしゃいます。また、ドイツのハイデルベルグ大学、それから台湾大学でそれぞれ客員教授を歴任されておられます。著書等に、『中国建築史の研究』、『中国古代造園史料集成』、『中国技術史の研究』などがございます。田中先生、よろしくお願いいたします。

次に、中国からご出席いただきました呂舟(ル・ズゥ)

先生です。呂舟先生は中国建築史、中国庭園史をご専門と され、イクロムの評議員、それから中国イコモス国内委員会副委員長、中国世界遺産専門委員会副委員長などを歴任され、現在、清華大学の教授でいらっしゃいます。また、世界文化遺産に登録されている紫禁城の周辺の歴史地区の保存や、文化的観光に関する調査研究のほか、避暑山荘、ラサのポタラ宮歴史地区など、数多くの歴史遺産の保全計画に取り組まれてございます。著書等に『清朝の建築規制に関する研究』、『中国文化財保存の歴史・遺跡の保全』、『文化的観光と文化遺産の保全』などがございます。呂先生、よろしくお願いいたします。

次に、韓国からご出席いただきました洪光杓(ホン・カンピョウ)先生です。洪光杓先生は韓国庭園史をご専門とされ、ソウル大学環境計画研究所主任研究員などを経られまして、現在東國大學校の教授でいらっしゃいます。ワシントン大学客員研究員、韓国伝統造形学会副会長などを歴任されまして、また韓国の文化財庁、文化財専門委員のほか、文化財、建築、都市計画に関する委員を多数歴任されておられます。著書等に『韓国の伝統造景』、『東洋造景史』、『韓国の伝統水景観』、『造景計画論』『韓国庭園踏査手帳』などがございます。洪先生、よろしくお願いいたします。

次に、本中眞先生です。本中眞先生は、日本庭園史をご専門とされ、議長の田中哲雄先生と同様に、奈良国立文化財研究所の研究員を経て、現在文化庁記念物課の主任文化財調査官でいらっしゃいます。遺跡整備や世界遺産、文化的景観などについても造詣が深い先生でいらっしゃいます。著書等に『日本古代の庭園と景観』、『借景』、『造園修景大事典』などがございます。本中先生、よろし

くお願いいたします。

次に、尼崎博正先生です。尼崎先生は日本庭園史をご専門とされ、京都芸術短期大学長、京都造形芸術大学副学長などを歴任されまして、現在、京都造形芸術大学教授でいらっしゃいます。また、現在、日本庭園・歴史遺産研究センターの所長でいらっしゃいますし、文化庁の文化審議会文化財分科会の名勝委員会の委員でもいらっしゃいます。その他、庭園や文化財に関する数多くの要職を務めていらっしゃいます。著書等に、『庭石と水の由来』『石と水の意匠』など多数ございます。尼崎先生、よろしくお願いいたします。

次に、仲隆裕先生です。仲隆裕先生は千葉大学園芸学部助手、京都芸術短期大学助教授などを経られまして、現在、京都造形芸術大学教授でいらっしゃいます。日本庭園学会関西支部長のほか、庭園や文化財に関する数多くの委員などを務めていらっしゃいます。著書等に『平安京の庭園遺構』、『日本庭園の系譜』、『史跡名勝平等院庭園の整備』などがございます。仲先生、よろしくお願いいたします。

最後に、当研究所文化遺産部長の小野健吉でございます。専門は日本庭園史で、奈良国立文化財研究所の研究員、文化庁記念物課の主任文化財調査官などを経て、この4月から当研究所の文化遺産部長となりました。著書等に『岩波日本庭園辞典』、『日本庭園－空間の美の歴史』、『発掘庭園資料』などがございます。

以上が円卓についていただく8名の先生方です。よろしくお願い申し上げます。

次に、この研究会での議論を充実するために事例のご報告をいただく2人の方をご紹介申し上げます。

まず、宇治の平等院庭園についてご報告いただく杉本宏さんです。杉本宏さんは、日本考古学、遺跡庭園をご専門とされまして、現在宇治市歴史まちづくり推進課の主幹を務めていらっしゃいます。杉本さん、よろしくお願いいたします。

そして、平泉の浄土庭園群についてご報告いただく佐藤嘉広さんです。佐藤嘉広さんは、日本考古学をご専門とされ、現在、岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課主任主査を務めていらっしゃいます。佐藤さん、よろしくお願いいたします。

以上、この研究会の議論の中心となられる先生方をご紹介しました。どうぞよろしくお願い申し上げます。

その他の出席者につきましては、お手元にお配りいたしました資料にその一覧、もしくは入口のところでお配りしました座席表に表示をしてございますので、ご参照ください。

さて、この研究会の事務局を務めさせていただく文化遺産部の私、平澤と申します。また、補佐の粟野でございます。どうぞよろしくお願いいたします。開催中何かございましたら、何なりとお申しつけください。本日から明日の冒頭のご報告、ご講演の間につきましては、私のほうで司会進行を務めさせていただきます。よろしくお願いします。

次に、日程について、ごく簡単にご説明させていただきます。既にご案内のとおり、この研究会は、本日から

主な出席者（敬称略、＊印は円卓出席者）
上段：田中哲雄＊（議長）、田中淡＊（副議長）、呂舟＊（中国）、洪光杓＊（韓国）、本中眞＊
下段：尼崎博正＊、仲隆裕＊、小野健吉＊、杉本宏、佐藤嘉広

3日間、この場所を会場に開催いたします。本日1日目はご講演とご報告、それからコメントをいただきます。あすの2日目は、午前9時半から冒頭に講演、その後2時間のディスカッションを2つ、午前と午後にかけて行います。明後日3日目は午後2時から3つ目のディスカッションを行いまして、午後4時過ぎを目途として終了したいと存じます。お手元に細かいプログラム、タイムテーブルございますので、詳しくはそちらをご参照ください。

資料については、時間の都合上、1つ1つご確認いたしませんけれども、不都合があれば、いつでも事務局までお申しいただければ幸いです。このうち、緑色の表紙の仮製本資料が、報告・講演の資料集になりますけれども、それぞれ日本語、中国語、ハングルの原文、先生方の原文を最初にしております。今回、日本語、英語への翻訳についてはこちらで手配させていただきましたので、現段階では基本的に仮訳とさせていただいております。

この国際研究会の成果につきましては、英語版、日本語版の報告書を作成したいと思っております。報告書編集段階で、また英語に翻訳した部分などについては当然精査いたしますけれども、特に英語の文章につきましては、レジュメ原稿をいただきました先生方におかれましては、会期中以降にも確認をしていただきまして、もし訂正すべき表現等ございましたら、電子メールなどでご連絡いただければ幸いです。よろしくお願いいたします。

少し前置きが長くなりましたけれども、それでは、本研究会の開催趣旨につきまして、当研究所小野健吉部長からご説明を申し上げます。

【小野】 開催趣旨等ということで、若干お時間をいただきましてご説明を申し上げます。先ほどの田辺所長の挨拶で主なところは大体述べられており、重複するところがあるかと思いますが、よろしくお付き合いいただきたく存じます。

奈良文化財研究所では、独立行政法人になりました平成13年度(FY2001)以降、文化遺産部において、古代庭園をテーマに研究を進めてまいりました。第1期の平成13年度(FY2001)から平成17年度(FY2005)については、奈良時代以前の庭園ということで、古墳時代以前から始まり、飛鳥時代、それから奈良時代、さらにその庭園での催しとしての曲水の宴といったことについて、研究を進めてまいりました。

第2期の平成18年度(FY2006)から平成22年度(FY2010)の5年間については、平安時代の庭園をテーマにしています。これまで文献資料、絵巻物などからうかがえる平安時代庭園の様相、あるいは発掘などからわかる貴族の住宅庭園の様相、さらには、天皇の専用の庭園である禁苑あるいは離宮といったものについての研究を進めてきて、4年目に当たります今年については、浄土庭園をテーマにさせていただいたわけです。

これまでの8年間にわたる研究会においては、日本国内の研究者だけによる議論だったわけですけれども、今回は、文化庁のご援助もいただいて、中国と韓国から専門の先生をお招きして、浄土世界を表現する庭園というものを中国、韓国、日本という東アジアの枠組み、観点から検討し、さらに平泉の浄土庭園群の評価についても議論をするということにいたしております。

この研究の中で、日本については、平安時代、すなわち10世紀から13世紀ごろの浄土庭園にスポットを当てることになると思います。先ほど田辺所長の話にもありました奈良時代の阿弥陀浄土院等について、今回の研究会では、とりたてて話題にはしておりませんので、この場をおかりして、私のほうから奈良時代の寺院の庭園、平安時代の浄土庭園の前史とも言うべき奈良時代の寺院の庭園について、少しお時間をいただいて紹介し、あわせて私の考え方なども簡単に述べさせていただければと思います。

奈良時代の寺院の庭園で池を伴ったものとしては、現在も残っております興福寺の猿沢池、それから記録に残っ

ております大安寺の「池並びに丘」の池、さらに先ほどから話題になっております法華寺の阿弥陀浄土院が知られています。猿沢池については、皆さんよくご存じのとおり、中心伽藍の外側、南門から一段下がったところに位置しております。また、大安寺の池というのは、境内に杉山古墳という古墳があるわけですけれども、多分その古墳に伴う 周濠であっただろうと考えられており、伽藍の中心部からは離れたところにあると考えられております。

これに対して、法華寺の阿弥陀浄土院については、寺院内の1つの区画の中で、仏堂と池が一体になった、いわば「臨池式伽藍」、すなわち、池に臨んだ伽藍、そういうふうな構成を持つ、確認されている奈良時代唯一のものであろうかと思います。場所は、平城宮の東院庭園のすぐ東隣ですので、明後日でも時間の空いたときにでもごらんになっていただければ幸いです。

ここで、阿弥陀浄土院の歴史について、簡単に触れておきますと、天平宝字5年(761)に光明皇太后、この人は奈良時代初期の実力のある政治家であった藤原不比等の娘であるとともに、聖武天皇の皇后でもあった方ですけれども、その光明皇太后が亡くなられた1周忌、1年後の1周忌斎会のために、法華寺の一角に造営された寺院がこの阿弥陀浄土院です。言うまでもなく、本尊は阿弥陀如来です。

実は、10年ほど前に、奈良文化財研究所が阿弥陀浄土院の池の部分を発掘いたしました。そうしたところ、阿弥陀浄土院の池とともに、その池に先立つ前身遺構も見つかり、同じような池であることが分かりました。すなわち、阿弥陀浄土院の池というのは、もともとあった池をつくりかえてできているということがわかったわけです。この阿弥陀浄土院の前身の池がどういうものかということですが、文献資料のほうからの研究によると、光明皇太后のお母さんであった県犬養橘三千代という方が観無量寿堂というお堂を建てたという記録があり、これが現在の法華寺の一角にあったということが分かります。そうすると、池というのも観無量寿堂という建物に伴ったものではないかということが推しはかられるわけです。

蛇足になりますが、「無量寿」という言葉は、「はかりしれない寿命を持つ」ということで、「無量寿仏」というのは、阿弥陀仏の別名、別称です。したがって、観無量寿堂というのが観無量寿経にちなむ堂名、阿弥陀仏をまつ

る仏堂であったということは明らかではないかと思います。そもそも阿弥陀浄土院を含む法華寺の敷地というのは、光明皇太后のお父さんであるところの不比等の邸宅の跡であり、阿弥陀浄土院の池、あるいはその前の無量寿院の池も、おそらくは不比等の邸宅の庭園の池を踏襲したものであったのではないかと、私は考えております。

そうしますと、阿弥陀浄土院にせよ、観無量寿院にせよ、邸宅の庭園をベースに、池の西側に阿弥陀仏を本尊とする仏堂を配し、全体として極楽浄土を具現しようとした、そういう試みではなかったかと考えているところです。阿弥陀浄土院については、立体的に三次元で浄土を表現しようとしたものであるということがうかがえる記録もあります。

こういうことを総合いたしますと、浄土庭園、一般的には平安時代以降のものと考えられますけれども、その起源というのをこのあたり、奈良時代にさかのぼることも可能ではないかと、私は個人的には考えているところです。

絵画等の画像との関係で言えば、中国の敦煌の壁画、あるいは日本にあるものとしては、當麻曼荼羅などに見られる、いわゆる「浄土変」、あるいは「観経変」と呼ばれるような極楽浄土の画像、それでは建物と池がセットになっています。もちろん直線的な護岸ライン(輪郭)を持つ池ですけれども、建物と池がセットになっています。この阿弥陀様がいらっしゃるところの前に池がある、こういう構成が阿弥陀浄土院にせよ、観無量寿院にせよ、仏堂と池という、それがセットになっている構成の基本的な考え方につながったのではないかと考えられるわけです。

以上のことをまとめると、次の2点に留意しておく必要があるだろうと思います。

1つは、阿弥陀浄土院または観無量寿院が、住宅庭園をベースにしているということです。これは、この後、杉本先生の話にも出てくる平安時代浄土庭園を代表する平等院についても、藤原頼通の住宅というか別荘の庭園をベースにしたものであるということに、ある意味通じる

のではないかと私は考えております。

さらにもう１つあるのは、これはやはり阿弥陀の西方極楽浄土という概念が浄土庭園の初めの段階から非常に強かったということです。したがって、浄土庭園を厳密にというか、狭い意味に定義するといたしますと、阿弥陀如来の極楽浄土というものを表現しようとした空間ということになろうかと思います。仏教においては、阿弥陀の極楽浄土のほかに、薬師の浄瑠璃浄土、あるいは釈迦の霊山浄土、さらに観音の補陀落浄土など、十方の仏様に対する十方浄土というものが想定されているわけですけども、浄土庭園成立の当初の段階では、あくまでも阿弥陀浄土が想定されていたということではないかと思っています。そして、その後、平安時代にさまざまな形に展開していくということがあろうかと、私は考えております。

この後、様々な講演と報告の下に、本格的な議論に入るわけですけれども、理想郷としての庭園、さらにその到達点としての日本の浄土庭園、さらにその平泉の浄土庭園群ということの本質について、多角的かつ深く検討することができるだろうと考えております。

一専門家として、私個人的にも大変楽しみであるとともに、実り豊かな成果が生み出されることを、今の時点から確信をしております。3日間にわたりますが、お集まりの先生方、ご参集の皆様、よろしくお願いしたいと思います。

【平澤】 それでは、次に、本研究会の議論で目指すべき検討の方向性などについて、田中哲雄議長から、ご提起いただきたいと存じます。よろしくお願いいたします。

【田中（哲）】 この『東アジアの理想郷と庭園に関する国際研究会』における議論において、目指すべき方向性について少しお話させていただきます。

１つめは、東アジアの庭園というのはご存じのように自然を材料として、自然を造形するといいますか、人と自然のかかわりから創造された庭園と思想と技術というものがあります。それが中国大陸、朝鮮半島で形成されている。それが思想と結びついて理想郷という１つの庭園の様式を生み出したのだと思います。まず、その理想郷の庭園とはどういうものかという大きな背景について検討したいと思います。特に庭園の意匠の中で、文化的影響を受けて類似する部分もありますし、風土や歴史の違いなどによって、独自の表現となる場合もあると思います。庭園に表現された理想郷について、特に庭園の歴史の観点から把握していきたいと思います。

２つめに、浄土世界を理想とする庭園について、具体的にその構成について検討したいと思います。特に、立地について、それから、建造物と庭園の関係について、また、変相図に描かれた図面の中の浄土と、実際につくられた庭園に見られる違いといったようなものについて、検討できればと思います。さらには、機能について、浄土庭園の機能としてはどのようなことが考えられるかということも検討していきたいと思います。此岸と彼岸というように、あの世とこの世というような分け方もありますし、天道を使われたというような、そういう機能、それから、実際に浄土庭園で行われた儀式などに関すること視野に入れて検討する必要があると思います。

３つめには、そのような様々な検討を踏まえ、東アジア庭園文化史の中で、日本において「浄土庭園」と呼ばれる庭園がどのように位置づけられるのかを検討していきたいと思います。特に、日本における理想郷としての浄土庭園の代表的なものとして、群として残っている平泉の事例の独自性、代表性がどのように示されるのかということについて検討することによって、そのようなことを検討していきたいと思います。

かなり難しい課題とも思いますが、皆さん方のご協力の下で、有意義な成果を導き出したいと思いますので、よろしくお願いいたします。

2. 質疑応答（５月19日および20日）

（1）本中眞氏の講演及び尼崎博正氏のコメントに対する質疑応答

（1）ーア

【呂】 尼崎先生から、自然の意匠の実現に際して、自然の石を持ってきて使っているということがありましたが、自然の真実もしくは写実性というのは、どういうことを意味しているのかということについて、もう少し深く教えていただきたいと思います。

【尼崎】 池というのは、海岸の風景を表現していると考えられています。その海岸の風景の１つが、砂浜の風景は州浜という手法で表現されています。一方、海岸風景のもう１つの典型的なものが、荒磯という風景です。その風景の表現が、実際の荒磯を形成している岩石を使うことで、庭園表現の真実性が実現されているというような、そういう意味です。

（1）ーイ

【洪】 韓国において庭園の思想的表現の仕方に関しては、神仙思想というのが大変重要な位置を占めています。尼崎先生はこの部分に関して、神仙思想に対して若干触れておられますが、本中先生からは、浄土思想または浄土庭園に関連するかたちで、神仙思想に関する言及はなかったように思われます。果たして、日本の浄土庭園において、神仙思想はどのように作用したのかしなかったのか、また、したとすれば、どういった形で関連性を持っているのか、そのようなことについてお聞きしたいと思います。

【本中】 神仙思想が、日本の庭園の立地や風水をとらえる上で、重要な影響を与えていることは事実だと思います。北側に山があったり、それから川が流れていく方向があったり、それは少なくとも韓国で見られる神仙思想

の流れをくむ考え方が、土地を選ぶという思想の中に、確実にあるのだと思います。それが浄土思想とどのように関係を持ち、浄土を形象化した庭園の中に、どのように投影しているのかということについては、私の頭の中ではまだ明確に整理ができていません。

もう１つ言っておかなければいけないことは、日本では『作庭記』という作庭の技術書が11世紀に出てきますけれども、そこに投影されている思想的な背景の多くは風水に基づくものですし、神仙思想の影響が非常に色濃く出ていると感じられます。ですから、そのような庭園の考え方、意匠、技術がそのまま仏教の伽藍の中に用いられて、浄土をかたどった庭園として成立する場合に、同じような理想郷をあらわす表現の手法として、同一の文脈のもとに捉えらたのではないかと思います。

(2) 杉本宏氏及び佐藤嘉広氏の報告並びに仲隆裕氏のコメントに対する質疑応答

(2) ーア

【小野】 佐藤さんに3点ご質問したいと思います。1つは無量光院について、東門あるいは中島から阿弥陀堂を仰いだときに、後ろに金鶏山が見えるという話がありましたが、実際には阿弥陀堂の建物が相当な大きさで、少なくとも中島から見たときには、後ろの金鶏山は建物に隠れて見えないという話を聞いたことがあるのですが、その点に関してのご見解を伺いたいと思います。

2つめは、これも金鶏山に関わることですが、そこに経塚があるという話がありました。金鶏山はいろいろなところから見て都合のよいロケーションにあるので、下から全部積んだとは思わないですけれども、上のほうで、築山というか、若干人の手が入ったような痕跡が有るのか無いのかについてお伺いしたいと思います。

3つめは、中尊寺の供養願文の話ですが、もととなる史料が14世紀の写本であることから、中尊寺という表題に書き間違いがあって、本来毛越寺のことを書いているのではないか、という指摘がされたことがあります。そのようなことについて、現在の研究成果では、どう理解されるのかについて教えていただければと思います。

【佐藤】 まず1つめのご質問については、多分、金鶏山は見えないと思います。もちろん、阿弥陀堂の高さによると思いますが、平等院と同じぐらいの建物だとすれば見えないと思います。

2つめのご質問については、金鶏山の調査自体が非常に古いということもあって、山頂部分に人工的な築山があるかということについては確認できていません。ただし、近世の伝承の中では、人工的につくり上げたということがありますので、今後の調査研究上の課題のひとつと考えています。

それから3つめのご質問ですが、供養願文に書かれている伽藍はどこかということで、大きく中尊寺大池伽藍説と毛越寺伽藍説がありますが、現在でも毛越寺伽藍説が完全に否定されたわけではなく、むしろその方が説明しやすいと考えている方も多いと思います。ただし、中尊寺の大池跡の新しい発掘調査成果と、最近の仏教美術分野の研究成果からすると、大池の周辺に願文伽藍があったと考えるほうが妥当ではないかとも言われています。

(2) ーイ

【呂】 佐藤先生に、平泉の関係で、寺院伽藍とその浄土世界の関係について、計画的にある軸線に基づいて施設が配置されたということを証明するような文献というのが有るのか無いのかについてお尋ねします。

【佐藤】 12世紀後半の平泉滅亡の状況を伝える記録に『吾妻鏡』という文献があります。この中には、金色堂の正面に政治行政上の拠点である平泉館があること、それから、無量光院の北に同じく平泉館があることが記されていま

す。すなわち、平泉館、柳之御所遺跡が、金色堂と無量光院の関係で説明されています。

【呂】 『吾妻鏡』以外に、何かそのようなことを示す文献資料はありますか。

【佐藤】 施設の配置の関係につきましては、『吾妻鏡』に限られると思います。

(2) ーウ

【洪】 杉本さんの報告を踏まえた上で、まず、本中先生にご質問いたします。本中先生の講演では、平等院の浄土庭園というのは典型的なものではないと言われたように私は理解したのですが、それはそのようなことでよいのでしょうか。

【本中】 私の報告では、そう申し上げました。平等院には、建物はもちろん残っていますし、庭園も残っています。それから、杉本さんが説明されたように、『扶桑略記』その他の文献から、対岸に山があり、そして群類を彼岸に導くという一種の浄土も兼ねているわけです。それは現地形に合うということもよく知られていることです。ただ、ご説明したように、浄土を描いた図像には、多くのものが山の向こう、あるいは、山中に浄土が描かれています。それは、当時の日記、さまざまな文献の中に山中成仏という言葉が出てくることにも窺われます。すなわち、山の中にある浄土が仏堂の背後に想定できるという点からいうと、無量光院の庭園のほうが山と仏堂と庭園との３つの関係をよく表しています。この点で、無量光院の庭園はより典型に近いと言えるのではないかと思います。

もう１つは、宇治殿という別業(別荘)が喜捨されて寺院になったという歴史的な経緯を持っている関係上、やはり平等院の池と仏堂の立地している位置関係というのが、浄土寺院としての最も望ましいロケーションを基礎として持ち合わせてはいないことが指摘できます。それに対して、無量光院は最初から浄土寺院として成立していますから、浄土を表現する地形をより確保しやすかったというが指摘できます。もちろん、中島に立つと無量光院の場合には背後の山は見えないのですけれども、柳之御所という居館・政庁から猫間が淵を越えて、無量光院の東門を入った地点では見えるわけですから、庭園・仏堂・山の３者の関係者の関係が確実に認知できるという点でも典型と考えられます。

【洪】 分かりました。次に、杉本先生からは、平等院と平泉との関連性という観点から浄土庭園に関して報告されましたけれども、先ほど本中先生が言われたようなことについて、杉本先生はどのようにお考えでしょうか。

【杉本】 本中先生が言われたのは、無量光院が浄土庭園の１つの到達点ということで、典型例であるというのは、背後に山があり、当初からお寺としてつくられている、その２点の意味であったと思います。私の報告は、基本的には典型ということでお話をさせていただいたというよりも、そういう宝楼閣系の伽藍形態がどういう形で変化しながら平泉に伝播していったのかということに軸足を置いたものでした。

当然、平等院よりも後に造営された寺院のほうが、よりよい形につくられていくでしょうから、そういう意味では、法会や儀式を行うときに、無量光院のほうが完備された形で整備されていたと評価できると思います。

それから、平等院の場合は、最初に比較的大きな別荘があって、それをベースにしながらつくっていますから、幾つかの制限は当初からあったということは間違いないと思います。これに対し、無量光院では、当初から一番都合に適ったロケーションのところに土地を選んで寺院を構え、宇治につくられた平等院のあり方を参照しながら、更に完成された形でもう一度阿弥陀浄土の世界の現実化を図っているということは十分妥当性を持って考えられることだと思います。

(3) 呂舟氏の講演に対する質疑応答

(3)－ア

【尼崎】 全体として、中国の庭園では、むしろ、文人の文化が底流にあって、いわゆる日本で言う「浄土庭園」のようなものは見当たらないということでよろしいのでしょうか。

【呂】 ひとつには、いろいろな条件あるいは原因によって、例えば、長安のほうの重要な寺院庭園に対しての考古学的な研究というのが、まだそれほど進んでいないという状況があります。今、現存している寺院庭園、あるいは非常に限られた考古的な資料から見て、私たちは日本と同じような「浄土庭園」のような様式をもった庭園が中国にあったかどうかということは、まだ確認できないという段階です。唐や宋の時代に確かにそういう庭園というのは出てきたかも知れません。しかし、あったとしても、非常に早くほかの庭園の様式に取って替わられたために、今、それをあるとは言えないということです。

それからまた、その当時の状況としては、文人化という中において、庭園の中に、詩にあふれる気持ちであるとか、また絵に描かれるような感情とか、そういうものの意を重んじるということがありましたので、それもひとつ大きな影響があるかと思います。

(3)－イ

【本中】 寧波の保国寺の話をされた中で、保国寺の「放生池」は「浄土池」とも呼ばれていたということのようですが、あのように四角い池を「浄土池」と呼ぶ事例は、ほかにはほとんど見られないということでしょうか。

それからもう一つ、放生池が「浄土池」と呼ばれる何か積極的な起源というのも想定できるのでしょうか。想像でも構いませんので、もしも呂舟先生にインスピレーションがあれば教えていただきたいと思います。

【呂】 「浄土池」と呼ぶ事例は、ほかのところにもありま

す。例えば、上海の方塔園です。

しかし、この「浄土池」と「放生池」との間の関係については、想像の範囲ですが、「放生池」が蓮池であったことからそう呼ばれたのではないかと思います。私が調べた範囲では、浄土池に関しては往々にして「奪生蓮池」という記述があって、つまり、仏教の中の言い方として、人の命が亡くなるとき(奪生)に、ハスの池(蓮池)の中に行って、そこに転生していくという言い方があります。

このようなことにつきましては、田中淡先生からも何かご意見をいただけると幸いです。

【田中(淡)】 少し関連したことも含めてお話ししたいと思います。

まず、「浄土庭園」という用語がひとり歩きしていることもあって、「浄土教」との関係を論じる点に少し苦しいところがあります。

仲先生のコメントにもありましたし、私もレジュメの中に書いていますが、「浄土庭園」というのは日本だけでつくった新しい用語で、その翻訳が難しいために、「浄土庭園」を論じるときに「浄土教」との関係を論じなければならないような誤解を招いていると、私は考えています。私もいままで国際会議で、しばしば「浄土庭園」を「浄土宗庭園」と誤訳されました。そこに重要な意味合いがあるので、私は自分自身で一々訂正していました。

このようなことにも関連して、「浄土池」ということについて、用例を全部見たわけではありませんが、大蔵経

の中の自然部にそういう用例は、比較的容易に探せます。「浄土庭園」という場合の「浄土」というのは、「浄土思想」とか「浄土教」に基づくという特定の意味ではなくて、一種の美称で、日本だけに通用する美称だと私は考えています。日本の古代寺院に関することで言えば、「金堂」は、「金」の「堂」と書きますが、別に金色のお堂のことではなく、伽藍の正殿という趣旨の特定の意味を指します。同じく少し時代下がって、「多宝塔」と言えば、日本において特定の塔の類型を示しますけど、これらも全く日本だけで使い出した用法です。

「浄土庭園」というのは、日本語としてあるわけですから、しかも、新しい言葉なので、なおさら、これを言葉として検討することを最初に持っていくと誤解の発生のもとになると考えられます。

中国の古典を見ると、例えば「金堂」だとか「多宝塔」とかいう言葉を探すことは簡単にできます。ところが、それは全く日本で言う「金堂」とか「多宝塔」という意味ではなくて、「立派な仏堂」、「立派な塔」ということを意味する美称として使われているわけです。

ですから、「浄土池」について全部調べたわけではないですが、おそらく同じような類いで、「仏教の池」という、ただそれだけの意味だと思います。

(4)洪光杓氏の講演に対する質疑応答

(4)ーア

【尼崎】 庭園に対する儒教からの影響について、少し補足説明いただければと思います。

【洪】 例えば、儒教思想は男女の居場所を区別するというところが強いわけです。その点で言えば、王室では、皇后の住んでいる宮殿とか、一般の家庭では、家の女性たちが住んでいる奥の間、そうしたところにある庭園は、女性たちが簡単に外に出られないように、また、そこの庭で遊べるように、つくったものと理解できます。

(4)ーイ

【小野】 新羅時代の龍江洞と、それから九黄洞の庭園の池について、例えば貴族の邸の庭とか、離宮の庭とかいろいろ種類が考えられるかと思いますけれども、それぞれどういう性格の庭であったと考えられるでしょうか。

【洪】 これまでの発掘調査成果によると、例えば、龍江洞の園池については、別宮、離宮の庭園であったということが分かっています。九黄洞園池は皇龍寺と芬皇寺という2つのお寺のすぐそばにあります。これを寺院の庭園と見る人もいますし、先ほどの龍江洞園池のように、離宮の庭園と見る人もいます。九黄洞園池が寺院の庭園だとするならば、日本の寺院庭園と何か関係があるのでないか、その部分の研究が必要だと思います。

(4)ーウ

【尼崎】 技術的な点について、レジュメの表現で「磨いた石」という表現、特に「自然石を前面のみ磨いて」という表現がありますが、それはどういう加工のことでしょうか。

【洪】 尼崎先生がご指摘されたのは、護岸の石垣のことですね。まず、2つの石をきれいに磨いたのには2種類あります。まず、曲線の護岸については、石の前面だけをきれいに磨いて、そして石を積む、接点だけをきれいに磨いて積んだわけです。一方、直線の護岸の部分は、1メートル以上の大きな石を使っていますが、そこでは、非常に長い石なので、全体をきれいに磨いて積んだわけです。

【尼崎】 自然石を磨いたという意味ではないのですか。

【洪】 完全に磨き上げたというわけではなくて、積み上げるための部分を整形したということです。

(4)ーエ

【本中】 3点、お尋ねしたいことがあります。1つめは、先ほど小野先生がご質問されていたことについての確認ですが、九黄洞園池は8世紀の遺構であって、仏教関係の庭園である可能性があるかもしれないけれども、今のところ、離宮の可能性も大きいということでよろしいでしょうか。

【洪】 『三国遺事』の記載を見ると、皇龍寺というお寺について、龍宮が南側にある、という記述が残っています。しかし、今の九黄洞園池の位置は、皇龍寺のちょうど北側に当たります。皇龍寺の記念館建設に伴う発掘調査で発見されました。こうしたことから見て、寺院と関係のある庭園ではないかということができると思います。まだ文献などで正確に確認したわけではないので、確実に皇龍寺や芬皇寺などのものであるという関連性について明らかにされたわけではありません。

【本中】 2つめは、九黄洞園池は8世紀の遺構だということですが、その後の11世紀から13世紀ぐらい、さらに具体的に言うと、私たちが課題としている12世紀の平泉の時代における仏教関係の庭園の遺構は、今のところ韓国では確認されていないと言っていいのでしょうか。

【洪】 12世紀には韓国にも庭園がたくさん存在していて、これを検討することで何か、この浄土庭園との関係を検討できるのではないかと思っていました。しかし、結果的に、池を伴う庭園遺構は確認されていないことが分かりました。ただし、12世紀の寺刹、寺院には庭園があって、そこに池があったということは分かっています。しかし、現在もそこにある池などが、11世紀から13世紀辺りの時期に造成されたかというのは分かっていません。

【本中】 最後に3つめですが、講演の中で「九品蓮池」については、別に報告したいというお話でしたが、今回のレジュメによると、現在は消滅しているとあります。これは地下に埋蔵されて残されているのでしょうか。それとも、今はもう破壊されて存在すらしないということなのでしょうか。

【洪】 この「九品蓮池」については、発掘調査が1970年代初頭に行われました。その結果、長さが70mから80m、幅30mから32m程度の楕円形の曲線を持つ池の跡が検出されました。諸事情があって、発掘調査は完全に終了することはできずに、遺構はそのまま埋められています。

(4) ーオ

【仲】 雁鴨池について、2つお尋ねしたいと思います。ひとつは、出水溝のところで、15cmの穴があって、そこ

に栓がされた状態で発掘されたと思います。私の記憶では、その穴はたしか１つではなくて、幾つかあったと思いますが、そのことについて補足して教えていただきたく存じます。

【洪】「長台石」(長方形の石の台)は、上の長台石と下の長台石とあったわけです。その間に穴が１つあったということです。発掘調査では、その15cmの穴に木製の栓を差し込んでいたという状態が検出されました。これは１つだけです。下に木製の台があって、溝が掘られていて、そこから水が溢れるようにつくられていたという形です。私見ですが、これは入水装置であると考えています。入水溝を経て水が入ってきますが、その水が溜まってくると溢れる。水位が高まって溢れるようになったら、溝を通して流れ出るわけです。この栓の差し込まれていた穴というのは、掃除なり、何らかの目的を持った水を抜く必要があったときに使われたのではないかと思われます。

【仲】 この点については、もし、その穴が複数あると、水面の高さを調整する機能があったものかと考え、お伺いいたしました。

もう１つは、池底の状態についてです。日本で言えば、平城宮跡の東院庭園や平城京の左京三条二坊に発見された宮跡庭園では、池底まで石を敷いて、水深が浅いために、水があっても、池底の石が見えるような状態です。雁鴨池でも水を通して池底を見ていたのではないかという説を聞いたことがありますが、洪先生はどのようにお考えでしょうか。かなり、水深が深いので、見えたか見えないか、私は少し疑問に思っていますが。

【洪】 雁鴨池の深さというのは、1.6mほどあります。先行研究を含め、私の知る範囲では、水底を見て観賞したのではないかということはなかったと思います。日本のように敷石を敷いたというような形ではなく、形態としては泥土があったと考えられます。

【仲】 泥土であれば、ハスを栽培していたという可能性は考えられるでしょうか。

【洪】 先ほど申し上げましたように、ハスの花に関しては、四角い枠が発見されたと申し上げました。この中にのみ、植えたと考えられます。ハスがそこから広がるのを防いだということです。

(5)田中淡氏の講演に対する質疑応答

(5)ーア

【洪】 太液池の中に蓬莱や瀛洲、方丈そして壺梁という４つの島が記載されているというお話がありました。神仙思想と関連しては、三神山とか三神島などと言いますけれども、この壺梁が入るというのは、中国では一般的なことでしょうか。

【田中(淡)】 建章宮の四神山の話をしましたが、一番古く確認できるのは『史記』における、蓬莱と瀛洲の二神山です。だから、一番古い格好は二神山で、その次に確認できるのは漢の武帝のときで、その場合は、蓬莱、方丈、瀛洲、壺梁の四神山になることが分かっています。ただし、その後の時代を通じて見ると、壺梁が加わるのは、むしろ例としては少ない。蓬莱、方丈、瀛洲、すなわち、洪先生のお話にもありましたように、この３つが出てくるのが、中国におけるこの後の時代、すなわち、魏晋南北朝から隋、唐にかけては、この３つ、三神山というのがほとんどスタンダードです。

(5)ーイ

【仲】 洪先生のご質問と関連しているのですが、この蓬莱、方丈、瀛洲、そして壺梁の諸島があって、海中の奇魚、亀、魚になぞらえているというお話がありましたけれども、その神仙島というのは仙人が住まいするところではなくて、魚や亀をたとえるために池の中につくったというふうに解釈したらよろしいでしょうか。

【田中(淡)】 明確に断言できないのですが、引用した文章の書き方、文脈から考えると、「神山や、亀、魚の類を象る」と理解できます。ですから、多くは神山で、しかし、池の中にいる亀や魚を象った島もあると、そういう意味に読むことができます。ただし、壺梁が亀島なのかとか、

そういうところまでは断定できません。

(5)ーウ

【小野】 図3の「李寿墓壁画楼閣図」において、この屋根の両脇に、何かモヤモヤとしたものが描かれていますが、これは何でしょうか。

【田中(淡)】 中国の画像表現の上でしばしば問題になりますが、墓の壁画、墓の画像石というのは、死者を祀る空間に建てられたものを象っているわけです。そこに、プロポーションからすると異常に大きな格好の鳥が飛んでいたりする場合があります。しかし、この図の場合は、おそらく屋根飾りの実体的なものの表現だろうと思います。このようなものは、少し誇張して描かれる傾向があります。なぜかというと、目立つところのデザインは誇張されて描かれる傾向があるので、これについては、例えば鳳凰のような鳥が、死後の世界において死者の住む住まいの屋根の上に飛んでいる様子を表しているのか、飛んでいたと想像して描いているのかは分かりません。しかし、実は、もとを話せば両方とも同じことであると言えます。それを象ったのが屋根飾りになるわけで、そうしたものが最終的に実際の建築の部材になるわけです。ですから、その辺のものの断定は非常に難しいのです。

しかし、例えば、後漢の時代の有名な河北阜城桑荘に5層の楼閣が確認されていて、それには欄干のところに鳥が飛んでいたり、屋根にも飛んでいたりします。その屋根の鳥は巨大なものです。ところが、欄干には、リアルプロポーションの小さい鳥、ハトみたいなのが飛んでいる。それは、おそらくほんとうに鳥が止まっている様子を表現したのではないかと考えられます。そして、屋根の上のすごく巨大な鳥というのは、おそらく死後の世界の死者が住む住まいの上で、ほんとうに象徴として飛んでいると考えられますが、そういう話は非常に難しい。一部について限って言えば、平等院鳳凰堂とか、そういったような類の、非常に装飾豊かな屋根飾りというふうに言っていいのではないかと思います。

(5)ーエ

【尼崎】 中国の早期庭園では、池と水面が重視されたとありますが、これはいろんな事例の中で、海と島とのイメージという点では非常に分かりやすいのですが、例えば白居易の邸宅で、水が5分の1を占めていたとかv、それから「曲水」、すなわち流水とか、それらは、どのようなイメージであったのかについては明らかにされているのでしょうか。

【田中(淡)】 そこまではとても分からなくて、白居易のような記述があるのは非常に珍しい記録で、おそらく白居易が、庭のマニアだったからだと思います。白居易に限らず私邸庭園といいますか、住宅付設庭園の場合は、皇帝の巨大な苑囿とは違って、池にとても巨大な島をつくって人工的に橋をかけてとか、そんなとんでもない過飾のことはできないわけです。白居易は結構立派な橋をかけていますけども、とてもそれらには及びません。

【尼崎】 中国における文人庭園の話の中で、植物については、やはり竹というのが特記されていますね。この竹の位置づけというのはどう考えたらよいのでしょうか。

【田中(淡)】 白居易は特に竹を愛好していた形跡があります。植栽についての趣味というのは時代によってかなり変わりますが、例えば唐の時代だったらボタンであるとか、宋でもボタンと思いますが、唐よりももっと前はウメだったと思われます。ボタンについては、「花王」といって称賛する。そういう時代が唐、宋のころはあったと見られます。当然、それぞれ種類は違います。一方で、白居易は、なぜか、竹がとても好きです。竹が好きというのが、必ずしも唐あるいは宋の文人にすべて共通かというとそうではない。人によって違うようです。

3. 討論－1（5月20日）

■庭園文化の基層を成す人と自然の関わり

【田中（哲）】 討論は、大きく『人と自然の関係－表現としての庭園』、『庭園における池－その意味の変遷』、『理想郷と庭園－東アジアにおける表現の本質と多様性』という3つの論点に分けて進めていきます。

まず、『人と自然の関係－表現としての庭園』ですが、最初に「庭園文化の基層を成す人と自然の関わり」という観点から検討したいと思います。

本中さんから、日本の『作庭記』という古い庭作りに関する技術書には、「自然の姿に即して庭をつくりなさい」ということが書かれているという話がありましたが、中国、韓国、日本で少しずつ庭園の自然観というのが違うと思いますので、中国の呂先生と韓国の洪先生には、それぞれ庭園における自然観についてお願いしたいと思います。

まず、呂先生からは、文人庭園に見られる自然観や、詩情画意を強調して庭園がつくられたということについて補足していただければと思います。

【呂】 中国の早期における庭園は、皇帝の庭園など、非常に大規模なもので、その中に大きな池が設けられました。それは自然の水の在り方を庭園の中に表現するもので、仙人の住む島を象徴するものもつくられました。それは領土の象徴という意味も持っていました。

ところが、その後の南北朝時代になると、社会的・政治的に変動の時期に入ります。そのため、文人の朝廷の中における地位あるいは官僚の地位というのが非常に不安定なものになりました。そこで、自然の中に住んで自然を愛でる、そして自然の中に詩心を見いだす「隠居」の風潮が出てきています。そして、ある種の植物の中に品格を見出す傾向も見られます。例えば、竹というのは気骨を表すものとして、象徴意義があると考えられています。また、松とか梅とかは人の品格を表すものです。

それから、もう1つ、隠士文化というのは、南北朝以降、まことに高尚で優雅、高雅なことの代名詞となりました。中国における伝統的な隠士に関する文化的考え方によると、比較的レベルの低い「小隠」は山中で隠居生活を送る。

中レベルの隠士というのは、町の中で隠居生活を送る。

そして、最もレベルの高い「高隠」は、朝廷の中にいながらにして隠居生活を送る、そういう伝統的な考え方があります。このような隠士文化の影響を受けながら、その後の中国庭園は発展していきました。そして、中位ないしは高位の隠士たちのさまざまな私邸庭園がつくられていくわけです。また、庭園の意匠あるいは景観については、自然を濃縮した形で表現しようという傾向があります。田中淡先生の講演の中に、白居易が「石癖」（石マニア）であったというお話がありましたが、小さな石を通して大きな山、大きな川を象徴しているわけです。

その後の文人庭園にもそういう傾向が見られます。これは「詩情画意」を庭園の中に取り入れるというものですが、小さな庭園の中の景色を愛でながら、大きな山、大きな川を象徴して、庭園の中に大自然の美しさ、雄大さを感じ取る、そのような流れがあります。

そして、その文人庭園の流れは、当然のことながら、その後、皇帝の庭園にも影響を与えていきます。例えば、17世紀の圓明園などにも文人庭園の影響が見られます。中には、わざわざ画家を南方に派遣して、有名な文人庭園を描かせ、それを参考に皇帝が庭園をつくるといったこともされました。さらに面白いのは、1つの王朝を打ち立てる軍人出身の皇帝たちが文人化の傾向を示すようになったことです。すなわち、自分自身が文化を持っている文人であるということをむしろ誇りにするようになります。

以上のように、中国社会における審美観であるとか趣味であるとか、あるいはその品位であるとか品格であるとか、そういうものはすべて文人を崇拝する傾向にあるわけです。

【田中(哲)】 中国庭園における自然の取り扱いとしては、文人庭園などで、「詩情画意」に基づきながら、自然の景色を縮めて庭園の中に収めるというように理解しました。

【呂】 そのとおりです。

【田中(哲)】 韓国では特に風水思想が強く影響していると思われます。洪先生には、どのような自然の表現の仕方が採用されたのかについて、補足していただければと思います。

【洪】 韓国において、なぜ庭園をつくられたのか、ということを考えると、中国や日本と同じく、人間が簡単に近づくことができない、つまり理想郷を表現したものであると言うことができます。人が生きている実際の現世というのが非常に苦しみに満ちたものであり、人はそこから脱却するために楽園を表現する、そうしたことが、庭園をつくる原因になったと見ることができます。韓国の場合は、それを神仙の世界として表現しているわけです。

また、韓国では、西方極楽浄土という仏教を中心とするそうした極楽浄土を夢見る理想郷もあったと言えます。仏国寺の九品蓮池などにも見られるように、極楽浄土を寺院に導入しようとした痕跡は、高麗、朝鮮時代を経てあらゆるところに見られます。もちろん形式の差はあったと思います。例えば、仏国寺の九品蓮池について、詳細は後の追加的な調査の成果を待つしかありませんが、その曲池が概ね楕円形であったことが分かっています。

高麗、朝鮮時代には、四角形の方池に変化していくわけですが、極楽浄土の象徴としてのハスが導入されたところを見ても、寺院の池が極楽浄土を表していたということが分かります。韓国の庭園がどのように曲線から四角形に変化したのかということはまだはっきり分かりませんが、例えば龍江洞や九黄洞の池などを見ると、その変化が窺い知れます。

朝鮮時代に入ると、政治的な争いによって、士大夫たちが隠遁生活を送るようになります。それによって、別荘(山荘)を建て、そこに庭園をつくったりするようになりました。その庭園を見ると、神仙世界を夢見たと考えることもできるし、また、その一方で、仏教世界を夢見たというふうに見ることもできます。しかし、朝鮮時代には、仏教が弾圧されて儒教が非常に好まれるようになって力を増していったので、士大夫たちが夢見たのは、神仙が住むそうした理想郷であったのではないかと考えられます。

曲線の池が直線型に変化したのを見るとき、新羅時代の神仙思想といったものが徐々に陰陽五行説の思想に取って替わられていった影響を受けたのではないかと思われます。こうしたなかで、自然をどのように庭園に取り入れたのかというのは、とても重要です。

韓国においては、自然を敬愛するという思想がありました。本中先生の講演にもあったような、自然を敬う、また自然に合致させるといった、いわゆるトーテミズム、アニミズムの側面は、韓国にも見受けられます。そのような形で自然を敬愛する韓国人にとって、庭園をつくるという段階になった場合には、その自然の本質を損なわないように取り込むという傾向が見られます。言い換えると、自然の持つ性格をそのまま一対一で取り込んだわけです。理想郷を表現する場合にも、本質的なものを変えずに、容易に分かる山の美しさ、木の美しさ、また水の美しさなどを表現しました。

中国の庭園では、スケールのとてつもない大きさが見受けられます。日本の庭園では、小さい形の美しさというものを感じます。韓国の庭園の場合は、あるがままの姿、一対一のスケールのまま表現しようとしたわけです。

もう１つ申し上げたいのは、韓国の場合は、庭園に対して意味を付与することがあるということです。例えば、「雁鴨池」というのはまさに海を象徴するものであるという意味づけです。また、入江や半島などにも、すべて意味を持たせています。渓谷の岩に見立てて石を置いたり、築山などで規模の大きな山をあらわしたりしました。これは、中国の文人庭園などに見られる山水庭園とも相通ずるものを感じます。岩を据え、また築山をつくるといった象徴的な景観をつくるというのは、日本の庭園とも通じるものがあると考えます。さらには、その庭園に名をつけること（命名）でまた象徴性を持たせます。

韓国の庭園の場合は、自然にあるがままの本質を取り入れ、そのまま表したと言えます。

【田中（哲）】 韓国の庭園では、自然敬慕、自然崇拝、アニミズム思想などが背景にあって、庭園をつくるときには、できるだけ自然そのものを映して庭園にするということでした。また、神仙の世界としての理想郷が庭園の要素として強いということだったと思います。

【洪】 そのとおりです。

【田中（哲）】 日本の場合は、『作庭記』に、地域の名勝を写すというような記録があります。田中淡先生のご講演の中で、中国の庭園でも、古くは、そういう名勝が取り入れられたとありましたが、それは後の時代にも続く話と考えられるでしょうか。

【田中（淡）】 先ほどの河南省洛寧にある二崤山という実在の名山を取り入れるというのがありましたが、それと非常に近いような記録は、唐・宋の時代にも見ることはできます。

【田中（哲）】 韓国では、名勝を庭園の中に取り入れるということはあったのでしょうか。

【洪】 先ほど申し上げたような一対一の取り込み、取り入れが解決できない場合には、例えば、山水画を通じた想像の世界といったものを取り込む場合もありました。

【田中（哲）】 いまの議論から分かるのは、中国、韓国、日本における庭園と自然との関係には大きな違いというのはなくて、基本的に自然崇拝から始まって、自然を誘導した形、あるいは、できるだけ近い形を庭園に取り入れる点で共通していると言えると思います。

【田中（淡）】 山水画と関連して、「詩情画意」ということからみると、少し中国は日本の感覚とはどうも違うような気がしますので、その点を少し補足しておきたいと思います。

中国には「画論」、すなわち絵画理論があります。例えば、北宋の郭熙が『林泉高致』という有名な画論を著しています。その中に距離感をあらわす法として、高遠、深遠、平遠、この３種類の遠景の画法のことを書いています。距離感の基準が違うものが３種類、遠いところ、近いところ、普通のところというのが、同じ画面に共存するという中国絵画独特の世界があります。これは西洋絵画にはあり得ないものです。

実は、それと全く同じ考えが中国庭園のつくり方で行われていた例があります。北宋の沈括が著した『夢渓筆談』という有名な本の中に、山水画の手法というのは、要するに小さいものを大きく見せるということに特徴があって、それは、ちょうど人が築山を見るのと同じ理屈だと書かれています。もし本当の山と同じようにそのまま写して下から上を見るとすると、重なる峰の一番前の山しか見えない。そうすると、実際庭園の中に縮小世界を表現しようとするときに、後ろの山が見えないから、山々が重なっているという空間表現ができない。すなわち、実際とは少し違うけれども、遠近の違いをミックスさせる山水画の方法によって築山はつくらないといけないということです。少なくと

も宋代の人にとっては、築山の遠近感と山水画の遠近感は、まったく同じ種類のものであったのです。

【洪】 韓国の場合は、17世紀末から18世紀初頭にかけて、中国の山水画の画風を非常に好む傾向がありました。そこで注目されるのは、中国の自然はとても勇壮でスケールが非常に大きく、それに比べて、韓国の自然は人間のスケールで小規模なものだということです。当時の知識階級の人たちは、山水画を邸に掛けて、その違いを楽しんでいたわけです。

例えば、李氏朝鮮時代に、中国の武夷山に実際行ったことがある人はいないと思います。しかし、武夷山の絵や文献などを通じて、そのすばらしい景色を楽しんだということが分かります。それで、韓国でも、武夷の九谷を真似たような絵がたくさん出てきたわけです。

このように山水画については、中国の山水画が非常に流行したわけです。しかし18世紀に入ると「真景山水」という画風がつくり出され、中国の山水画の画風とは大きく違ってきました。その後の庭園には、「真景山水」の画法を取り入れられるようになり、韓国の本来の趣向をそこに導入することになったと考えることができます。

■庭園文化の伝播と発展

【田中(哲)】 次に「庭園文化の伝播と発展」ということを検討していきたいと思います。

1つは思想的な背景として、神仙思想に基づいて神山をつくるという話があります。本中さんからは、酒船石遺跡の事例で、水を流すときに水を溜める亀型石造物が紹介されました。あるいは、洪先生からは、雁鴨池の事例で、同じような導水部分で亀の形を象った石造の水槽があるということをご紹介いただきました。『作庭記』の中でも、こういう鶴とか亀とかという吉祥の動物を庭園の形態として使うという話が出てきます。鶴も亀も不老不死を象徴する動物ですが、そういうものを直接象って庭園の中で使うことについて、洪先生はどのようにお考えでしょうか。

【洪】 珍しい花や珍しい動物といったものを庭園に導入するようになったのは、日中韓3国とも皆同じだと思います。雁鴨池でもそうした珍しい動物、花を導入したという記録があります。また、吉兆を示す尊い動物や花なども導入された形跡が見られます。

韓国では、早くから「四君子」と言って、梅、蘭、菊、竹の4つがとても尊い植物であると言われてきました。 また、「十長生」と呼ばれる動物がいました。これら儒教的な思考から発した「四君子」や「十長生」を庭園づくりに取り込んだと考えられます。

【田中(哲)】 日本も中国も韓国も、古い皇室の庭園で、必ず珍しい鳥その他の動物、それから珍しい樹木などを庭園の中に取り入れているという記事が出てきますが、それらは、そういう吉祥のものを取り込んだという理解でよろしいでしょうか。

【小野】 その点には少し異論があります。記録に出てくるいわゆる「珍禽奇獣」を庭園の中に飼うということは中国で始まったことであって、それは、秦漢帝国が非常に版図を広げたということを実証するものとして、帝国の領域内に生息する珍しい鳥や珍しい獣を庭園に取り入れるということだと考えられます。日本や韓国は、それを真似ていると考える方が妥当だと思います。田中淡先生は、その辺のことについていかがお考えでしょうか。

【田中(淡)】 小野先生の意見に全く同意します。『三国史記』にも同じような珍禽奇獣に関する記載があったと記憶しています。このようなことは、例えば『日本書紀』などにも見られますが、それは中国の古典資料の表現をそのまま使ったものです。つまり、レトリックとして文体を真似ている可能性が考えられます。洪先生が引用された部分についても中国の史料に同じ文章があります。これは「珍禽奇獣」の表現に限らず、同様のことがしばしば見られます。ですから、その場合に実態を写したのか、ただ文章を写したのか、その点については判断しかねます。

【田中(哲)】 日本、韓国においては、実態とは別に、特に文献の中でそのまま文章だけを写したということもあり得るということですね。

【小野】 さらに言えば、それを実体的なものとして庭園で実現しようとしたことが、少なくとも日本では見られるということです。ラクダやオウムなどを新羅から譲り受けてそれを庭園で飼うということなど、それは、まさに史書に書かれた言葉を実体化していくということでもあったと思います。

【田中(哲)】 そういうことも踏まえて、庭園で珍禽奇獣を飼うというのは、3国に共通した着想としてあると思います。特に古い時代の皇室庭園などでは、狩り場のような機能や、果樹園や動物園などの要素もあるのではないかと考えられます。また、唐の大明宮における太液池のように、水練の池みたいなのもあったと考えられます。

例えば、そういう機能の中に庭園の観賞も含んでいたのか、それとも鑑賞は別にしてそういう機能が中心であったのかなど、特に初期の庭園についてお伺いしたいと思います。

【呂】 中国の文献の中にも、庭園の中に珍禽奇獣が飼われたという記載があります。富豪袁広漢は、その邸宅の庭園でサイを飼っていたとされています。ましてや皇室庭園であれば規模も相当大きいので、もっとたくさんの動物を飼っていたに違いありません。それは、各地から貢ぎ物として挙げられてきた動物を飼っていたと考えられます。漢の武帝の上林苑の中には、クマもいたということが見られます。その中には野獣がたくさんおりますので、皇室庭園の中では狩りも行われていたと考えられます。

また、名勝旧跡を模倣したものを庭園の中に取り込んだ事例もたくさんあります。例えば、北京の頤和園には、広州の西湖の様子を取り込んだ部分があります。それから、避暑山荘の中にも、鎮江の金山寺を真似た部分があります。

■東アジアにおける庭園の表現

【田中(哲)】 次に「東アジアにおける庭園の表現」ということで、各国の庭園における類似点と相違点について検討します。特に庭園意匠の相違点について、ご意見お願いします。

【小野】 少し前の議論と関連して、人と自然との関わり合いということで言うと、東アジアの庭園に共通するものとして、自然は支配するものではなく、自然は親しむものであるという考え方があると思います。大きく言えば、東アジア全体において、それが庭園のデザイン(意匠)のモチーフ(主題)になっていると考えられます。

そのように考えると、少し違和感を覚えるのは、日本に

おける飛鳥時代の幾何学的な形を持った池と、特に韓国で高麗以降に出てくる「方池円島」のような幾何学的なデザインをつくる庭園です。それらは、東アジアの庭園が基本としていると考えられる「自然は親しむべきものだ」という概念からは少し外れているように感じられます。もしかすると、考え方は同じかもしれないですが、少なくともデザインとしては異質な感じがします。

【田中(哲)】 曲池はどちらかというと自然風で、方池というのはかなり人工的という感じがする。それが、東アジアにおける庭園のデザインとして、どのように評価されるのかということです。洪先生、いかがでしょうか。

【洪】 韓国の庭園は、三国時代、統一新羅時代、そして高麗時代までは、大体自然風の時期と言うことができます。その後に、「方池円島」というものが登場して、幾何学的なデザインに変わっていったことが窺われます。

この「方池円島」というものは何を象徴するのかというと、「円」は空、すなわち「天」を象徴するわけです。そして「方」は土、土地、「地」を象徴しているわけです。

そこに亭や四阿を建てますが、それは「人」を象徴しているわけです。そうして、「天」と「地」と「人」を1つにすることを象徴したわけです。

韓国の庭園のデザインの中で独特なことがあります。中国や日本と同様に、韓国の場合も池に島をつくるというのが一般的な傾向であると言えます。しかし、韓国ではその島に行くための橋をかけることはありません。なぜならば、その島は理想郷であり、そこには人がアプローチできないと考えたからです。

【田中(哲)】 韓国でも古い時代には方池で島は無いわけですが、方形の池というのは寺院の池などに見られると思いますけど、その点についても補足願います。

【洪】 寺院の見られる方形の池というのは百済の時代にもあります。韓国の浄土変相図には直線の池があるのを見たことがあります。古代の百済の定林寺の跡にも、2つの方形の池が並ぶ「双池」と呼ばれる遺構が確認されています。

【田中(哲)】 日本においては、7世紀の飛鳥時代に方形の池が見られます。『日本書紀』に、百済から来た路子工(みちこのたくみ)という人物が「須弥山」と「呉橋」を築いたという記事があることから、かなり百済との交流があって、当時の庭園の技術も百済からされた可能性があると考えられます。この点について、小野さんから補足をお願いします。

【小野】 飛鳥の方形の池というのは、ほぼ間違いなく百済からの影響でできたものだと思っています。先ほど、後世の話として、「天円地方説」が「方池円島」のもとだということがありましたが、これはもともと中国の考え方であると思われます。それを中国や日本では、あまり庭園の具体的なデザインとしては採用していないのに、韓国ではそれを取り入れて庭園をつくっているということは、とても韓国に独特の点ではないかと考えられます。

古代において日本にも影響を与えた方形の池が韓国でつくられたとすれば、それが韓国のオリジナルのものなのか、それとももう今は全然痕跡もないけれども、中国でそういうふうな方形の池のような庭園のデザインがあって、それが例えば百済に伝わって、さらに日本へ伝わったと考えられるのか。その辺は、7世紀あたりにおける朝鮮半島の方形の池の起源というのが、朝鮮半島で発生したものなのか、それとも中国から影響を受けてつくられたものと考えられるのか、中国で実物が残っていないので、なかなか難しい問題だと思いますけれども、この点については呂先生からもお考えをお伺いしたいと思います。

【呂】 いま、私の印象に残っている範囲では、宋代の絵の中に方池を見たように思います。ただ、古代の文献から見ると、秦の始皇帝が長い池を築いたとありますので、それがおそらく長方形をしていた方池ではなかったかと考えられます。

【田中(哲)】 会場の方から、工藤先生、どうぞ。

【工藤】 四角い池の話が出ていましたが、飛鳥石神遺跡の方池と全く相同するものが、実は陸奥の国、多賀城の前身になる郡山官衙遺跡というところにも見つかっています。

それと、その飛鳥石上遺跡の場合、『日本書紀』によりま

すと、当時の日本国家の領域外の人たち(南方の島の人たち、北方の蝦夷(えみし)それ以外の海の彼方の人たち)が飛鳥にやってきたときに、そういう境域外の人たちをもてなす儀式がそこで行われたということが書いてありますし、そのことは、出土品によっても確定されております。

郡山官衙遺跡の場合にも、北方の蝦夷に対して同じような儀礼が行われたというふうに考えてよいと思います。ところで、7世紀後半というのは、日本の国家体制が大和朝廷の時代から一歩踏み出して、日本の天皇を中国の皇帝になぞらえるという考え方が非常にはっきりとしてくる時代です。

そういう考え方の下に、夷狄(いてき)に対応する儀礼が、飛鳥でも、東北地方でも行われたと考えることができます。そうすると、方形の池のところでそのような儀礼を行うということの源流は、実物は確かめられていないにしても、中国にある可能性が高いと思います。技 術的には百済からかも知れませんが、考え方の源流は、皇帝に貢ぎ物を持ってやってくる遠方の人たちをもてなす儀礼の場として、中国の皇帝がそういう四角い池をつくったという可能性を示唆するものではないかと私は思います。

【田中(哲)】 もてなす儀礼として、その方形の池で宴を行うということ、その原点は、韓国からさらに遡って、中国にあったのではないかということですが、いかがでしょう。

【田中(淡)】 まず、先ほど呂先生が言われたことについて、少し補足します。

私のレジュメの註1に『史記正義』の『秦記』というのを引きましたけれども、秦の始皇帝の咸陽の蘭池宮について、そこには、長さ200丈と書いてあります。『三秦記』には、先生が言われたように、「長池」と書いてあります。それは細長い池という意味で、長さ200丈ですから、異常に細長いと考えられます。殷の時代の偃師商城の北側からやはり非常に

細長い切石で囲われた、そして、どう見ても愉楽施設としか思えない池が発掘されています。そこには、排水渠があって、入水と出水と両方ある溝が検出されているのですが、それは、形としては、やはり、異常に細長いです。完全な長方形です。それが、もしかしたらその原点に当たるのかも知れません。

ただし、いわゆる韓国とか飛鳥のような真四角というのは前例がないので、想定しようがない。文献では、西周の、紀元前(BC)600年代の『詩経』の中に、何かそれらしいものがあったらしいということは分かりますが、はっきり正方形と書いてあるわけではないので、文献的にはあまり明確ではありません。

【田中(哲)】 その池の意匠の違いということで、気になるのは護岸です。池の護岸をするときに、雁鴨池では切石を積み上げています。それから、遣水も基本的に切石でつくられた流れになっています。日本では、基本的に護岸や遣水は自然石でつくるのが原則となっているわけですが、その辺の違いというのはどのように考えられるものでしょうか。

【洪】 日本の場合、なだらかな曲線を持った遣水といった水路が特徴的なところとして見られるわけですが、韓国の場合は、ほとんどそういったところは見られません。

韓国の場合、水路構造に関しては、例えば幅で見ると、雁鴨池庭園の場合には60cmから1m、大変単調な、切石のような整形をした石を重ねています。

【田中(哲)】 護岸も、雁鴨池の場合は、加工した石を積み上げていますよね。

【洪】 そのとおりです。池の周り、石積みの部分ですけれども、曲線を持っていながらも、やはり切石を整えて積み重ねています。

【田中(哲)】 例えばそれは、新羅の石材加工の技術が相当進んでいて日本では真似ることができなかったということなのか、それとも、自然を表現する仕方としてできるだけ自然の材料でつくりたいという日本的な意向があるからか、などの点についてはどうでしょう。

【洪】 よく分からないところではありますけれども、それは、日本には日本なりの考えがあって表現したのではないかと、私は思います。韓国には、その当時、直線的な水路がつくられたりします。曲線をもったところにも石積みはするけれども、単調な形の積み方というのに馴れていたという点があったのではないかと思います。

【仲】 雁鴨池について、洪先生のご講演のときに水位についてご質問させていただいたのはこのこととも関係します。池の水位が低いときは、かなり下の石積み、すなわち切石が何段も見えて、私から見ると不自然に思ったのですが、一昨年行ったときには水が満水で、切石の部分はほとんど水で隠れて、切石の上に組んである自然の岩のほうに目が行って、日本庭園の護岸の石組みとの親しさを覚えました。先生がご覧になって、雁鴨池の水位というのは、どのあたりに設定されるのが好ましいとお考えなのか、教えていただけますか。

【洪】 とてもよい質問をしていただいたと思います。韓国と日本の池の関係、池の様子を照らし合わせてみますと、護岸が曲線か直線になっているかということはありますが、水位という点から見ても、韓国と日本の違いが指摘できます。

伝統的な韓国の池を考えた場合には、地面と水面とに例えば1mくらい間隔が空いているのが分かります。日本の場合に、地面と水面との関係を見ると、多くの例で、あまり高さに違いが無いと思います。そのため、曲線を形成したときに、石積みをしなくても不自然ではない。しかし、韓国の場合、李氏朝鮮時代までは同様でしたけれども、例えば雁鴨池では、1m60cmから70cmの差があるわけです。池底から石積みをするので、実際は、先ほどのご指摘のように、石を積んだと

ころが見えるような状況になるわけです。

【田中(哲)】 日本の庭園には、あまり深い池は無いので、石を積み上げるほどの深さは有りません。そのような水深の違いによる意匠の違いは確かにあるということですね。

【尼崎】 少し話をもとに戻したいと思います。

加工技術の話が出ました。飛鳥の島ノ庄遺跡では花崗岩の石積みをしています。酒船石にも複雑な加工を施していたりしています。ですから、それが韓国から伝わったものかどうかは別にしても、飛鳥時代には岩石を加工する技術はあったと考えられます。

しかし、日本では方池の護岸は自然石を積んでいますので、それが技術の問題ではないということは明らかだと思います。意匠性が先なのか、技術者集団が違うのが先なのか、そういうこととも関係するような気がします。

【田中(哲)】 意匠についてもう１つ確認したいのは、田中淡先生からご説明された、池の中で石を彫って鯨をつくったりとか、亀とか魚の島をつくったりという、かなり造形的な意匠の部分をつくられることがあるのですけれど、それは中国において独特の話でしょうか。それとも、韓国にもありますか。

【田中(淡)】 先ほど引用した文献に「鶴の洲浜」、「マガモの渚」とあるのは、そこに鶴がいるとか真鴨を飼っているとかいうことではなくて、洲浜とか渚に当たるところ自体を鶴の形やマガモの形になぞらえたものであったと理解できます。

【田中(哲)】 先ほどの島の話も同様と考えられますか。

【田中(淡)】 島の話は、あまりにも神仙世界の考えとかということのほうに重点があるので、実際にそれが亀島だとか魚の格好をした島なのかとか、そこまでは限定できません。ただし、鯨を彫ったというのだけは、明らかに鯨の格好の石を彫ったと理解できます。

【仲】 少し別の話になりますが、もう一つお伺いしたいと思います。日本庭園では、泉や湧き水を大事にして水源にしたり、祭祀の場所にしたりするということがありますが、中国や韓国の古代庭園の中で、泉や湧き水などをどのように捉え、また、どのような意匠があったのかということについて、お分かりの点があったら教えていただけませんか。

【洪】 雁鴨池には、特別に何か動物をまねてつくったような島はありませんでした。しかし、入水溝の亀の石像のように、部分的に景観として使われたということは見られます。次に、泉、湧き水についてですが、韓国では泉を非常に身近で、神聖なものと考えていました。ある一定の自然崇拝の現象と見られます。その泉に精霊が宿っていると思われていました。湧き水のうち、いいところの水は、薬水としても使われましたし、またお茶を沸かすのにも使われました。ですから、実用的な意味もあったわけです。

【呂】 中国のほうでも水というのは非常に身近なものでした。例えば、王維の詩に「輞川荘」とか出てきましたけれども、非常にそれは身近なものでした。ただ、古代中国においては、湧き水、泉というのは庭園の中に取り入れるのではなく、そのものを観賞する、景勝地の中心に据えるという考えがありました。よい湧き水の出るところは、天下第一泉と呼んだりしていました。また、中国の庭園では、澱んだ水ではなくて「流れる水」を重視して、湧き水を庭園の中に取り入れるというのは無いように思います。

【田中(淡)】 少し補足すると、古代中国でも泉はお茶の水の等級の一番として必ず置かれていました。庭園の要素というよりは、そういったものとして理解されていたわけです。

【田中(哲)】 ありがとうございます。後のテーマとも関連することもありますので、取りあえず『人と自然―表現としての庭園』についてはここで終了したいと思います。

4. 討論－2（5月20日）

■東アジアの庭園における池の意味

【田中（哲）】 この前のセッションでは、『人と自然の関係－表現としての庭園』ということでいくつかの検討をしました。自然に対してそれを表現する庭園でどのような自然の取り扱いというのがあるかということ。庭園文化が、様式として、機能として、どのような形で伝播したのかということでした。そういう検討を踏まえて、次は『庭園における池－その意味の変遷』ということを検討していきたいと思います。

まずは、「東アジアの庭園における池の意味」についてということで、既に前のセッションにも、曲池と方池の違いとか、水深の違いによる意匠のあり方とかということが検討されましたが、あとは、庭園における池の機能ということを検討する必要があります。ひとつは、龍舟鷁首の舟を浮かべて池で遊覧するということとか、池の中で水生植物を栽培するというようなこと、さらに、池の中に蓮を生けるということで「蓮華化生」あるいは「蓮華往生」というような、そういう基礎が当然あるわけです。

【高瀬】 雁鴨池の庭園の池の評価に関することですが、洪先生が神仙思想に基づく世界をつくり出しているというご見解で、私もそれはそうだと思いますが、雁鴨池の庭園についてはもう１つ、浄土の世界をつくり出している、そういう二面性があるのではないかと私は考えています。どうして雁鴨池を浄土庭園、いわゆる浄土世界を再現している庭ではないかと私が考えたのかについては、理由がいくつかあります。

１つは、この池の平面型を見ていただきますと、西岸が直線的な護岸になっていて、建物が5棟、西岸に建てられていますが、その建物がことごとく池に向って張り出しているということです。これは、今まで見てきた画像の浄土変相図なんかに見られる形に極めて近いと私は思います。この5棟の建物のうち、少なくとも3棟は池のほうに正面性があるというか、一番北の建物と東北の隅に張り出した建物と、一番南寄りの建物は、内部も回廊で囲まれた区画になっていて正殿のような建物、後殿のような建物があります。少なくともこの池のところに張り出している建物については、内部向きというよりはむしろ池のほうに正面性があると考えます。浄土変相図にも建物と建物を廊でつないでいる形が出てきますが、平面を見ていただいても分かるように、廊でつながっている形です。建物の平面型が、浄土変相図の形に非常に近いというのが第1点です。

それから、2つめは、この立面ですけれども、これは、西岸が他の岸より高くなっていいます。西の岸だけ二重基壇になっていて。これは、特別高く基壇を立ち上げるために二重基壇にしているのだと思うのですが、それは、なぜここだけこういう形で立ち上げるのかということを考えると、やはり東側からの景観、あるいは舟、池の上での舟に乗った視線からの景観というのをかなり意識して特別に高くしている。それから、護岸も西の岸だけ特別な護岸になっていますね。ほかのところは長方形の割石を基本にして小さい石を積んでいますが、石の上部の基壇、葛石に当たるような石は、特別な長方形の切石を使っていて、ここには、建物が上に載るということもあると思いますが、特別な基壇を西にはつくっています。

３つめは、この点が一番重要だと思いますが、池の中から仏教関係の遺物が大量に出ています。これは、阿弥陀三尊仏ももちろん出ていますし、平等院の鳳凰堂の壁面を飾っているような掛け仏の類、それから飛天ですとか、要は建物の壁面、内壁を飾っていたような金属製の荘厳具が大量に出ていまして、これらが西岸の下から出ています。報告書に遺物の分布図が掲載されていますが、これを見ると西の建物にあったものが下に落ちたという状況を示していると理解できます。ということは、これは、雁鴨池は一応宮殿の遺跡というふうに考えられていますけれども、仏

殿の機能も併せ持っていたと考えられます。仏教はもう新羅 以前から朝鮮半島は受け入れて、とても仏教が交流しているわけですけれども、浄土思想、浄土教ももちろん入っていて、そういうものが、この雁鴨池の宮殿でも、仏事が行われていた、あるいは仏殿的な機能をこの建物が持っていたということが遺物で分かるわけです。

４つめは、洪先生の御講演で私も初めて知ったわけですが、木の枠が出ていてそこに蓮が植えられていたというご見解を述べられましたが、蓮があったということ。それから雁鴨池の池底自体は地山を掘った、いわゆる池底に石を張っているようなそういう池底ではないわけです。ですから、蓮があったということも１つの傍証になるのではないかと思いました。

そういうことで、今までこの雁鴨池の評価については、先ほど言いましたように西から東を見た景観ということで、西から東の景観ばかり問題にされてきましたが、もう１つ東から西を見る景観というものをかなり意識してつくられていると思いました。雁鴨池のようなこういう形のものというのは、中国にも無いですし、日本にも無いし、韓国にもこれ以外に無いと思います。そういう意味では非常に特殊なもので、これが日本に伝わったのかどうかはよく分かりませんが、浄土の世界を再現しているという意味では、おそらくこれは１つのあり方を示しているのではないかと考えています。

最後の１つは、この平面型で、３つの島が、東岸と、すごく淵へ偏ってつくられています。池の北西隅と東南隅と東南寄りというふうに、非常に片寄せてつくられている。これを、なぜこうしているのかなということですが、私の考えでは、これは西岸の前面に広い水面をつくり出そうと。そういう意識で東の岸から西岸を見たときに、これだとそんなに島が邪魔になりません。手前の護岸は結構入り組んでいますけども、広い水面があって、その水面越しに立ち上がる基壇という景観をつくり出そうという平面計画ではないかと思います。

【洪】 雁鴨池庭園は浄土世界を表しているのではないかということについて、傍証になるのではないかとの観点で５つのことをおっしゃっていただきました。一面理解できる、納得できる点がありましたし、またそうでない部分がありました。私なりに考えてところを申し上げたいと思います。まず第１に、雁鴨池の西岸部分は直線構造をしており、５つの建物があって、その建物が池のほうに張り出しているというご指摘でした。

そこで、浄土変相図から見て取れるというお話をされましたが、その内容は、一理ある内容ではありますが、韓国の場合、この浄土変相図が出てくるといいましょうか、その時期というのは11世紀から12世紀、すなわち高麗時代になります。

したがって、この時期に、浄土変相図を真似て、それを象った庭園をつくる、つくるというのが、果たして可能であったかどうかという疑問があります。

第２に、二重基壇をつくったという指摘でした。
しかしながら、もともと西岸のほうは地形的な構造が2.5mほど高い形状になっていました。

そこに建物を建てたのです。

したがって、地形の特殊性、いわゆる違いというのを利用しながら建物を目立たせようとしてつくったというところには、確かに合っていると思います。
特に、基壇がある西側の石積みを東側と比べると、東側は屈曲を経ていますけれども、西側に関しては成形をした切石、石を割ってそれを積んであるという点に関しては、視覚的には目を引こうという意図を感じさせます。

そこで、そうした新しい視角、視点でご覧になったわけですが、東から西を見た場合に、高くなっているところから、そこはその高いところは目立つところになるわけです。これが日本の浄土庭園との類似性があるのではないかというお話でした。

私が考えますに、この日本の浄土庭園との類似性の有無に関しては決断を出すのは難しいと考えます。しかしながら、視覚的な効果を出すためにこういうような構造になっているというところはうなずけます。

それから、第３に、島、池の底から仏教関係の遺物が大変多数出土したというのはおっしゃるとおりです。雁鴨池には内仏堂というのがありました。これは宮中の宮殿の中にある仏堂院、仏堂を言います。この寺の名前は「天柱寺」です。そのお寺に、阿弥陀仏を祀ったと記録があります。天柱寺というのがあったので、仏教の遺物が出てきたのはそのせいだと言うことができます。

したがって、これをもって雁鴨池を浄土世界である仏教の象徴性を担っていると決めつけてしまうのは妥当かどう

か、もう少し議論が必要なのではないかと思っております。参考までに申し上げますと、池の中にある５つの建物、池に向かってある５つの建物の中には、内仏堂というお寺、お堂はありません。

４つめのことで、重ねて申し上げたいのは、木の枠が発見されたと申し上げましたけれども、そこで蓮の花を栽培していたというのは、間違いありません。

その蓮の花が阿弥陀浄土の象徴であるために、雁鴨池を浄土世界にあると見るのは、一理あると思います。

５つめにご指摘いただいた島の件について、島が東側に寄っているということで、西側の水面を広く見せたかったということをおっしゃいましたけれども、それは、合っていると思います。

この３つの島の配置については、次に申し上げる３つの理由があると思います。

１つめは、高瀬先生がご指摘されたように、視覚的な効果をねらったものであるということです。（平面図で１と示してある）１番目の島は、入水溝のすぐそばにあります。１番目の島が入水溝のすぐ近くにあると思いますけれども、それは、滝があって、その滝から水が流れたときにそれが両脇に流れるように、割れるように、そういった効果をねらって、入水溝のすぐ前に島があると思います。

そして、2番目の島ですが、それは出水溝の近くですけれども、それは高さが少し低目につくってあります。ですから、1番の島のそばから水が入ってきて、少し低目になっている出水溝のほうの島に向かって、水が雁鴨池を一回りしてそっちのほうに出ていくように高さが少し低目になっているということです。

以上、その５つですね。高瀬先生のご意見を伺って、その５つを通じて浄土世界と思うことについて私なりの意見を申し上げました。

浄土庭園としての蓋然性はあるものの、まだまだこれが浄土庭園であるというふうな確証を得るところまではいっていません。

しかし、私の個人的な考えですけれども、その当時、この中を見ても、天柱寺というのがありますし、そこに阿弥陀仏が奉られていますね。そして、また、蓮の花がそこで栽培されていた、そういった事実を見ましても、新羅時代の新羅の国教が仏教であったということからも、十分これが浄土世界であった可能性はあるのではないか、浄土思想から来たものであるという可能性は十分あると思います。

田中淡先生からのご指摘があったと思いますけれども、「浄土庭園」という概念は日本の概念であるということであったと思います。

この「浄土庭園」とは一体何かということについて、私なりの考えを申し上げますと、仏教寺院として阿弥陀世界を象徴するものが「浄土庭園」ではないかと思います。

【高瀬】 天柱寺と雁鴨池との関係ですけど、文献では雁鴨池は天柱寺の北にありというふうに出てきます。ですから、おそらく、これは、韓国のほうの文献の解釈がどうなっているのかですけども、普通考えますと、天柱寺というお寺の区画があって、その北側に雁鴨池の宮殿の区画がある。ですから、雁鴨池の宮殿と天柱寺は、隣接はしていたのかもしれませんけども別の区画であると読むのが正しいのではないかという気がします。ですから、天柱寺の遺物が雁鴨池の池に落ちていたと考えるのは、少し無理があるのはないかと思います。

【洪】 その点について、高瀬先生がご指摘されたことが、全面的にそうであるとは申し上げられません。なぜかというと、「内仏堂」といって、これは宮殿の中にあったわけです。つまり、わざわざ宮殿の外に敷地を何かつくって、別区画でつくったものではないのです。内仏堂なので、別のところにということは考えにくいと思います。

【高瀬】 日本の平安時代の貴族も仏像を邸宅中に祀ったりとか、あるいは、平城宮でも大極殿で経を詠み上げるような仏事が行われたりします。古代においては宮殿の機能として、仏教と結びついていますので、宮殿が仏教的な性格を持っていて、仏事が行われていた、あるいは、そういうことがさらに変化していって、平安時代に貴族の邸宅などがその後お寺になるというのはよくあることすけれども、そういう意味で、邸宅だから仏像があったらおかしいとか、宮殿だから仏教関係の性格とは別だということはないと思います。

【洪】 ここで申し上げられるのは、内仏堂として雁鴨池の南側に天柱寺があったわけですね。つまり、その雁鴨池が荒廃する中で、仏像とか仏教用具、そうしたものが水の中に沈んでしまった、出処されてしまったということがあるのではないかと思います。

【小野】 今の高瀬さんの話も大変面白いと思ったのですけども、確かに仏教が盛んで、この池に蓮が生えている様子を浄土と見る人も多分いたのではないか、ということになる気がいたします。結局、「浄土庭園」とは何かという定義に、また戻ると思います。

少し話を戻して、東アジアの庭園における池の意味ですが、まず中国で秦・漢の時代から神仙世界を表すものとして、池と島の庭園がつくられたということがありました。そこでは海の中にその神仙島が浮かんでいるということで、やはり池は海のイメージでつくられたのだろうと思います。それが中国から韓国や日本のほうに伝わったのだろうと思います。

一方、日本でいうところの「浄土庭園」の池というのは、海のイメージとは違って、浄土変相に描かれるような宝池というものをイメージとしてつくられたものであって、イメージするところが違うのではないかというのが、私が今感じているところです。

【田中(哲)】 古代の庭園は海を設けることがひとつの特徴として見られます。雁鴨池でも、臨海殿という形で、海に臨んでということで建物に名前を付けたということです。それから、先ほどの中国の例でも、鯨の彫物などというのも海の風景のひとつの表し方だと思います。日本の場合、池が海の様子を表すために、例えば毛越寺などでは、荒磯をつくったり、洲浜をつくったり、ということになると思うのですけども、それは「浄土庭園」の池であるというのは海でないかということを示しているひとつの事例でもあると思います。

【小野】 毛越寺がモデルにした「浄土庭園」の池のというのは、もともとが住宅庭園の池をモデルにしてつくられたもので、それが浄土庭園にもそのまま転嫁された、という理解ができるのではないかと思います。

【田中(哲)】 ということは、毛越寺はもともと住宅だったという理解ですか。

【小野】 そうではなくて、毛越寺の場合は、法成寺、法 勝寺という系譜の上にあるもので、その法成寺や法勝寺の庭園の池のデザインについては、もともと邸宅・宮殿系の庭園における池で、そのまま海のデザインを模していたわけです。それが「浄土庭園」に転嫁していった、その系譜の延長上に毛越寺の庭園があると、私は理解しているわけです。

【田中(哲)】 分かりました。ここからは「浄土の画像における池」ということとも関連付けて議論を進めていきたいと思います。

■浄土の画像における池

【尼崎】 今の小野さんの話にも少し関連するのですが、これは、自然崇拝や理想郷など、いろいろな思想的なことを含めて、ある「観念的なこと」があると思います。それと自然中心の「風土性」と生活空間という「属性」とも言えると思います。それらを切り離して考えてしまうと、それぞれが何か1本の系譜であるように見えるけども、実はそうではないのではないかということだと思います。これはひとつの仮説です。

例えば、浄土変相図については、呂舟先生の講演で、最初に300もの浄土変を描かれたということがありました。それは、仏教の信仰を広めるための1つの手段だというふうに考えるとします。そこには何らかの形でその現実のモデルがあったと考えざるを得ないということでした。その場合、時の権力者の宮殿なりにそのモデルを落とし込むと、最も受け入れやすい。そうすると、呂舟先生も書かれていますように、唐代の宮廷建築との関係が何か明確に判明していく。要するに、世俗で或る概念を受け入れやすくするために、どちらかというと「権力者」あるいは「みんなに受け入れられている空間」に重ね合わせるという手法を取ったのではないかと想像されるわけです。これはとても自然なことのように思います。ですから、浄土だから方形というよりは、世俗の空間の最も高貴なもの、あるいは権力のある空間がそういう空間だったから、それと結びついたのではないかというように、考えられるわけです。

【田中(哲)】 1つの要素だけではなくて、自然崇拝とか、基本的な理念と、信仰を広げるというそういう機能の話と、それから定着して認められている空間とタイアップしてい

るということです。そういう幾つかの趣旨を併せて考えないと見誤るということです。

【尼崎】 ですから、小野さんのご意見も、それは生活空間として当時最も権威があった庭園の形態に思想をかぶせれば、当然それを基にした造形として展開していくと思います。形態や配置だけではなくて、そういう中から生まれてきたことを考える必要があります。

例えば、山中浄土のことについても、浄土思想として山中浄土がどこでできたのかという話から始めるよりも、本中さんの講演で、最初に御神体としての三輪山が出されたように、自然信仰が山岳信仰や修験道として展開していったとします。そして、それらがいわゆる浄土思想というものに乗っかってくると、池とお堂があって、その向こうに山があるということと重なって二重構造になります。そのような日本固有の輻輳した思想を統合すると、浄土庭園のような空間ができていくのではないかというふうにも考えられます。

【本中】 いまの尼崎先生のご意見については、私もそのとおりだと思います。基本的には、山中に浄土があるという日本人の意識は、記録的にも古くから出てきます。それは、山中にこもって修業するという修験道のその世界とも結びついています。人間の死後には山の高みに霊が昇っていって、その果ては天へと昇っていくということです。西方にある浄土の世界とは違いますが、死んだら高いところへ行くのだという考え方はあったわけです。ですから、山の向こうにパラダイスがある、山の上にパラダイスがあるという考え方は、日本人の山を神聖視する意識の奥にあったと思います。それは、浄土世界とも結びつきます。例えば「兜率天浄土」という弥勒の浄土の世界は山の上の天高くにあるわけです。浄土とは正式には言えないものだと思いますけれども、そういうパラダイスがあるという意識があるわけです。そういう仏や仏になろうとして励んでいる弥勒のそういう世界を求める意識と、それから山の中に入って呪術的な力をつけようとする修験 道の世界などもすべてやはり融合する形で、山というものが持っている神聖性というのでしょうか、神秘的な力みたいなものは日本人の中にあったのだと思います。

もう一方では、庭園は「遊ぶ世界」ですね。この世において浄土の世界に遊ぶためにつくられたのがおそらく「浄土庭園」であろうと思います。「仏の世界」と「遊ぶ世界」というのは、基本的には分離しているもので、功徳を積んでさまざまな修業の果てに浄土世界での甦生がかなうという考え方も一方にあるわけです。ただし、貴族の間では、さまざまな作善を積むことによって浄土世界に転生できるという考え方も出てくるわけです。そこで、仏像をつくったり、伽藍造営の一環として庭園をつくったりということが、浄土の世界に生まれ変わるための重要な功徳の積み方だというふうに捉えられてきたところがあると思います。庭園と浄土、あるいは仏道とがつながる機縁というのも、やはりそこに、この世において浄土の世界にまみえたい、遊びたい、そこで詩歌管弦をしながら、それでもやはり仏の世界にまみえたいという当時の貴族の要求があっただろうと思います。

無量光院で、背後に山があり、池があり、そして仏堂があり、というこの３つの要素が１つの軸の中に位置づけられて完成される背景には、尼崎先生のご意見のように、山に対する古くからの日本人の意識などが複合して反映していると思います。また、小野さんからのご意見のように、庭園が住宅の中で完成してくると、それが遊ぶ世界であり、そして仏の最も重要なパラダイスの世界に遊ぶということと結合して、末法の世の中に入った12世紀に、１つの伽藍のスタイルとして、あるいは庭園のスタイルとして完成してきたのが、「浄土伽藍」あるいは「浄土庭園」と呼ばれているものの流れなのではないかと思います。

【田中（哲）】 このことは、「浄土庭園」の定義というのをどうするのかということに繋がりますし、次の「浄土庭園における池と堂舎との関係」とも深く関わってくるので、そこも含めて「変相図」、それから「池と堂舎の関係」についての検討に進みたいと思います。すなわち、池と堂舎がどういう

位置関係にあるかということ、あるいは、建物の機能、それからその堂の前に必ず池があるのかという配置の問題などがあるかと思います。

■浄土庭園における池と堂舎との関係

【杉本】 本中先生のご意見との関係で、少し感想を申し上げます。

もともと浄土変の中には、宝楼閣の背後には虚空があって、特に自然の山とかが描かれているわけではありません。そのことは、平等院の仏堂壁の浄土変にも見られます。

それと、日本の「浄土庭園」と言ったらいいのか、「臨池式伽藍」と言ったらいいのか、分かりませんが、京都の中で成立してくるそういったものは、最初から背後に山を背負うのかといったら、そういうこともありません。おそらく山が仏堂の後ろに出てくるというのは、それより少し後のことで、無量光院はその中の最初なのかなとは思うのです。

もともと当時の日本人には、山の中にもう１つの世界があるという「山中他界観」があって、おそらく浄土信仰の中に、観想念仏によって自分たちが極楽に往生しようという考え方から、たぶんどこかの段階から、弥陀がこちらに来ること、すなわち、来迎を願うほうに信仰が移っていくのだろうと思います。その来迎を願うことが強くなっていくときに「山中他界観」の問題があって、いわばどこから弥陀が来るのか、その来る目安として山が、「臨池式伽藍」の背後に山が出てくると考えたのではないのかなと、私は考えています。

【田中（哲）】 「浄土庭園」の機能を考えるとき、極楽往生を目指すとか、追善供養の伽藍とかがありますが、今の話のように、来迎のための装置ということになると、仏堂と苑池だけではなくて、自然がどのように含まれるのかということに関わると思います。

【大矢】 中国の場合は「神仙島」、韓国の場合は「方池円島」、

そういうふうに聖なるものを隔離する空間としての池という意味合いが強いと思います。日本でも、浄土思想が伝わっておそらく間も無くして、彼岸と此岸、こちら側と あちら側という考え方になってきた。無量光院の仏堂の後ろに山があるというのは、全体を含めてあちら側だと思います。

しかし、私はもう１つの視点があるのではないかと思います。特に浄土ということに絡んで池を考える場合には、やはり阿弥陀経的なあるいは観無量寿経的な原点に帰る必要があるということです。そうすると、そこでは極楽世界、あるいは浄土世界そのものが池となります。この場合、浄土そのものが池で、池は隔てるものではありません。そこでは何をするかというと、もともとの意味は、沐浴をしているということです。その聖なる池に仏が生まれた、池そのものが聖なるものであるということが、もともとの仏教の中心だったはずだと思います。沐浴のための浄土の池は、阿弥陀経によりますと四角の池で、しかも四方から階段がある。この階段というのは、おそらくベナレスのガンジス川の川べりの階段のようなイメージで、それは自然の川ですから乾季と雨季では水位が違っているので、そこに沐浴しに降りていくためには当然階段が必要なわけです。

私は、この庭園における池の意味というのも、そういう移り変わりというのを考えるべきではないかと思うわけです。それで、もう一度平泉へ戻って考えますと、平泉の場合は、再び池が彼岸、此岸の区別ではなくて、またそのまま浄土の世界になったのではないかというように考えることができると思います。

【田中（哲）】 少し新しい議論だと思います。池というのは、結界とか此岸・彼岸の区分だけじゃなくて、池そのものが浄土の世界であって、沐浴という行為を通じて浄土の世界に入ることになるのではないかということでした。

【呂】 もし、浄土ということにおいて庭園と池の関係を考えるのであれば、やはり仏教法典のほうにも立ち返る必要があるかと思います。今回の研究において幾つかの文献に当たってみました。例えば、法華経の中には「浄土とは煩悩のない世界である」というような記載があります。また、阿弥陀経の中にも「七宝蓮池の中に浄土が溢れている」というような記載があります。その四方には階段があり、金、銀、瑠璃、ガラス、銅でできています。その上のほうには楼閣

があって、同じように金、銀、瑠璃、ガラス、あるいは瑪瑙などのような七珍八宝というような装飾がなされています。さらに、蓮池の色は、金あるいは黄色、赤、白、さまざまな色の光を放っています。そのような、たくさん美しい描写があります。浄土世界においては、美しい音楽が流れていたり、あるいは時間によって異なる鳥のさえずりが聞こえたりというような描写もあります。そして、こういう描写を見ると、仏教の発祥の地であるインドやその周辺国家、例えばネパールなどの仏教建築、あるいはその環境と非常に似通ったところがあるのではないかと思います。

すなわち、浄土を考えるときに、浄土変相図などから想像される世界だけに限られるものではないのではないかと思われるわけです。そして池の形については、方形であったりあるいは幾何学的だったりというような話になりましたけれども、それはインドの影響を受けているのではないかと思います。また、仏教伝播の際、伝える道具のひとつに浄土変相図などが使われたわけですけれども、1つの画像の中に、浄土の世界の要素、すなわち、宝楼閣や七宝蓮池、八功徳水を描くとなると、非常に制限があるかと思います。

日本には、鑑真和上が浄土変相図をもたらしたということが正倉院関係の文献の中にあるようです。しかし、日本にもたらされた後、日本の状況に応じて変化を遂げるということは十分考えられます。例えば平泉の毛越寺の庭園で既に池は方形の形をとっていません。

どうしてその方形の池が、曲池となったのか、日本でどうしてそういうような変化が起きたのかというのは、ご在席の皆様方のご意見をさらにお伺いしたいと思います。

【田中(哲)】 このことについてはいかがでしょうか。

【高瀬】 日本において「浄土庭園」に関連する一番古い事例と言えば、今のところ阿弥陀浄土院にまで遡れると思います。阿弥陀浄土院の造営は西暦760年代で、島を持つ曲池には、池の中に張り出す建物が建っていて、その建物につながる廊状の橋もあります。

【田中(哲)】 今のところ阿弥陀浄土院については一部しか発掘調査されていないので、詳細はさらに調査しないとまだ分からない部分がありますが、いずれにしろ、阿弥陀浄土院においても、曲池の可能性があるということで、日本の寺院庭園においては、かなり当初から曲池というのが採用されていたということが窺われる重要な事例と言えます。

池と堂舎の関係については、田中淡先生に少し補足願いたいと思います。

【田中(淡)】 仏典の原典とその内容を画像化した「観経変相図」という話の原点に戻って、それと実在した庭園の関係について補足したいと思います。

仏教世界における浄土というものは、先ほど呂先生も言われたように、明らかにインドの仏典起源と言えます。インドの仏典に出てくるものはすべて四角です。それが源流であるということは動かしがたい。問題は、敦煌の壁画に見られるような「観経変相図」、日本にはそれが「當麻曼陀羅」に見られるようなかたちで伝わっているその図像では方池であるのが、日本の寺院庭園では何かの理由で曲池になっている、ということです。

浄土世界を反映した庭園の実例が非常に少ないと、最初に私は言いましたが、例として写真をお見せした昆明の圓通寺というのは、実物で唯一ほとんど観経変相図にピッタリした方形の池を持つ事例です。さらに、実はまだ誰も今まで指摘していませんが、実物ということでなければ、唐の時代に、真四角の苑池で、中島があって、文殊菩薩を安置する龍堂という建物が中央にあるという事例を窺うことができます。五台山を訪れた円仁の記録に、五台山に中台、西台、東台とあって、中台には4丈四方(40尺×40尺)の池があるということが見られます。その真ん中に、中島に龍堂と名づく小堂がある、と書いてあります。ですから、少なくとも中国の場合は、インド起源の仏典に極めて忠実なかたちで、実際に、四角い池をつくり、中島を設けていたということが記録にあるわけです。

それから後、日本に伝わったときに、「當麻曼陀羅」のような「観経変相図」の1タイプが絵画作品として日本に招来されて、それに基づいて、いわゆる日本で言っている「浄土庭園」のような曲池のものに繋がるのだろうと思います。どうしてそうなったのかについては分かりません。ただし、中国には方形苑池のものが実在したということは押さえておく必要があります。いきなりインドの方池から突然に曲池とはならないでしょう。

【小野】 日本では仏堂とセットになるのが当初から曲池であったということについては、これは住宅庭園からそのまま

転用したからだと思います。そこでは、池と仏堂というものがセットになっているという点に集約して考えたから、曲池であるか方池であるかということにはこだわらなかったというふうに解釈するしかないのかなというふうに思います。

【田中(哲)】 ただ、住宅庭園からすべて変遷しているわけではないですね。

【小野】 阿弥陀浄土院を一番初めの例とすれば、それは藤原不比等の邸から繋がっているということは明らかなので、それがプロトタイプになったということではないでしょうか。

【田中(哲)】 さらに調査したら分かると思いますけれども、藤原不比等の邸がそのまま阿弥陀浄土院に変遷しているかどうかということは、今後の重要な課題のひとつと言えます。

【工藤】 先ほど来の議論の中で、「神仙思想」、それから仏教にかかわる「浄土」という２つのキーワードがありました。それらは、あたかも対立する別個のもののような形に理解されることがありましたけれども、そもそも中国に仏教が入ってきた当初は、神仙の１つとしての仏という時代があったと思います。その後で徐々に、神仙と異なる性格を持つ仏という方向に進んできたということがあるのではないかと思います。

その次に、神仙の世界、海に神仙の島があるとか、そういうものが庭園の源流になっていくのだろうというお話がありました。司馬遷の『史記』に書いてある始皇帝のお墓の中の姿がもし事実であるとすれば、始皇帝のお墓は、地下宮殿の中に水銀でたくさんの川や海をつくり出したということになります。中国の場合、亡くなった権力者が葬られる地下宮殿がもう１つの死後の宮殿であったわけでありますから、中国の場合にはそういう神仙世界というものが、この世だけではなくてあの世にもつくられたという点で、少なくとも日本ではそういうことが無いと分かります。では、朝鮮半島ではどうなのか。壁画というところまで視野を広げると、高句麗にはおそらくそういうことはあると思います。新羅の古墳は地下宮殿ではないように思いますので、そこら辺で、あの世に神仙世界を持っていく地域とそうでない地域というものが生まれてくるというようなことが考えられます。

日本の池を持つ宮殿と、中国の本来のもののあり方というのが、どう違うかということを考えるのかということが原点にもあると思います。

【小野】 「神仙世界」というのは、やはり「不老長寿」を求める世界ですよね。ですから、「浄土」が「来世の浄土」だとすると、そこに根本的な違いというのはあるのではないかという気がします。その辺り、田中淡先生は、いかがお考えでしょうか。

【田中(淡)】 ご指摘のとおりと思います。

神仙世界というのがありますね。これは昇天するということがもとになっています。それは、とこしえの命を得て昇る、つまり、不老長寿です。そのことを求めて秦の始皇帝も漢の武帝も必死の努力をして仙薬をつくり出し、いろいろな鉱物だとか水だとかをたくさん実際に飲んでまで、それを実現しようとした。先ほどご指摘のあった始皇帝陵のこともそうで、人魚の油でもって火が消えないようにして永久に地下空間が明るくなるようにしているとか、水銀で大海をつくり、水銀の川を流したとか、そういうのも明らかにそうで、死んだ後地下に埋められるのですけれど、それは仏教以前の話ですが、中国のネイティブな宗教観あるいは死生観で言えば「魂魄この世にとどまりて」とよく言う、そのことを目指しているわけです。その「魂」と「魄」と二種類の「たましい」があって、メンタルなほうのスピリットというのは永遠不滅だから天に昇り、フィジカルなほうのボディは地下に埋まるわけです。だから、「魄」は死んでいるのですけど、「魂」は死なない。「魂」はスピリットでエネルギーですから。そういうのが中国のネイティブの、仏教伝来以前のはるか昔からの老子・荘子の世界であって、その伝統が道教に繋がります。神仙思想というのは、まさにそれなのです。

つまり、中国庭園の原型というのは、そちらのほうから出発している。浄土というのは「欣求浄土」で、杉本さんの非常に分かりやすい説明にあった「来迎を請う」、すなわち、来迎を欣求するという方向に変質するということでした。それは日本の中の話ですが、非常に分かりやすい説明です。それは、本中さんのプレゼンの中にあった「二十五菩薩来迎図」からみても、左上から光線が射してきて二十五菩薩が降りてくる、つまり、その往生思想というか、それはとても日本的展開だと私は思いますけども、小野さんが言われたように、根本的に異質な生命観というか、死生観だと思います。

■日本に展開した浄土庭園の特異性・希少性

【田中(哲)】 次に「日本に展開した浄土庭園の特異性・希少

性」ということで、平等院から無量光院、それから法成寺・法勝寺から毛越寺へと続く系譜について、杉本さんから補足をお願いします。

【杉本】 平泉の浄土庭園と京都の浄土庭園という、それぞれを表す概念や単語が無くて少し言いにくいのですけれども、それらの基本的な差は次のように考えられます。京都における基本的な「臨池式」あるいは「苑池式」伽藍については、法成寺を最初にすればいいと私は思っていますけれども、その基本は、たくさんの仏たちが庭園の周りに、庭園の前の仏堂に祀られているということと言えます。それは、都の貴族たちが長い時代の中で彼らが築き上げてきた仏教に対する考え方であって、仮に、純粋な形で何かだけを、例えば、阿弥陀浄土だけを願っているわけではなくて、さまざまな仏の功徳を一身に集めたいと思っている、普通の当時の貴族たちの考え方がそのまま反映されているのだと思います。

基本的にはそのような、多様な仏教の仏たち全体に対する信仰があるわけですけれども、それを形としてつくっていこうと思ったときに、平安時代中期から非常に日本の中で興隆する阿弥陀浄土をイメージさせるように工夫されている観経、観無量寿経というものが、非常に有効に作用したのだと思います。ですから、「浄土庭園」というのは、浄土教によって伽藍が構築されているとかということではなくて、どちらかというと、漠然とした浄土への信仰というものを形として見せたものが法成寺であったのだろうと思います。したがって、当然、大日如来とか密教の諸尊も全部そこに祀って全く平気だったわけです。

こういうことを踏まえて、平泉を見てみると、無量光院は、当然、平等院を見本としていますから阿弥陀の浄土ですけども、特に毛越寺などは薬師如来を祀っていて、少し違います。一方で、京都の法勝寺もまた本堂が胎蔵界の諸尊で、中島に立つ八角九重塔と愛染堂には金剛界の諸尊を 祀っていました。そのように、実は京都の中における苑池式浄土伽藍というのは、阿弥陀堂があると同時に、極めて強い「密教」性を持ちながら存在しています。そういうものが、実は平泉の中では、毛越寺においては、阿弥陀という「顕教」側に本尊がシフトして、庭園の形だけはそのままでいるということです。

さらに平泉と京都と比べて面白いのは、例えば法勝寺でも法成寺でも平等院でも、当時京都でこの程度の寺院であ

れば大体持っていた「五大堂」というお堂が、平泉には無いという点が見て取れることです。それが何でそうなっているのかというのは、よく分かりません。このことは、平泉に「密教」がないということではなくて、少なくとも、「密教を表現するお堂」が明確に見出せないということを１つの特徴として指摘できます。それは、平泉がどういう選択をしたかという話と関係することですが、平泉が京都の持っているものをそのまま持ってきているというようなことは、少なくともお堂に関しては無いと言わざるを得ないと思います。私は報告の中で、都でつくられたものが「純化して伝播している」とも言いましたが、京都の貴族たちが持っていた多様な仏に対する信仰というものを「もう少し整理して少し発展させている」という言い方もできると思います。

【小野】 杉本さんがつくられた「平安期浄土教寺院の変遷」という図は、大変よくできていて感心しているのですが、法成寺の前の段階で、無量寿院の段階、すなわち九体阿弥陀堂だけがある段階があったということを、この図につけ加えておく必要があると思います。九体阿弥陀堂と池というセットが、もう１つ別の道筋として、現存する浄瑠璃寺の庭園に繋がっているということを表現しておけば、かなり説得力があると思います。

それと、平等院ですが、これは、建築史の方面からの研究の成果ですけれど、藤原頼通の自邸である高陽院が、いわゆる「寝殿造住宅」とは言いながら、四方に池を持つというふうな非常に特異な形を持っていたということがあります。四方に池を持つという高陽院のイメージがやはり平等院に反映をしているのではないか。この図は寺院庭園に関することとしていますのでこれに加えるかは別にしても、そのベースにはそういうものもあったかも知れないということは、注目して

しかるべきだと思います。さらに言えば、平等院から法勝寺に矢印が行って、そこから毛越寺に行っている矢印が必要なのかは疑問です。むしろ、毛越寺のほうは、法勝寺からの矢印だけで説明ができるのではないかと思います。

いずれにしても、この図では、広い意味での浄土伽藍が、平泉で完成形に到達したことが分かりやすく表現されていて、とても優れた図だと思います。

■平泉の浄土庭園群の代表性・典型性

【田中(哲)】 伽藍配置の変遷、顕教・密教の違い、お堂に祀られた仏さまの違いなど、いろいろな形で変遷があるということが確認されました。それらが変遷しながら、平泉に向かって繋がっていったというのは、紛れもない事実です。

そこで、これまでの議論を踏まえて、「平泉の浄土庭園群の代表性・典型性」ということについて、深めていきたいと思います。

【本中】 平泉の寺院伽藍につくられた庭園、あるいは、浄土様式の庭園と言ったらいいのか、その庭園の顕著な普遍的価値ということですが、いろいろな浄土を表す図像が日本に入ってきて、それが実際に実体化されるときに、それまでに日本で既に確立していたさまざまな庭園の意匠や技術そのものが優先されて、それが寺院庭園の中に生かされていったということが想定できると思います。それともう1つ、私自身は、やはり日本人が持っているさまざまな自然に対する信仰の精神、あるいは、自然神崇拝思想と言っていいと思いますが、それが融合した形で、平泉の伽藍の中に実現されているということが、浄土庭園の最も完成されたスタイルであると言えることだと思いますし、純化されているというふうな意味でも言えるのではないかという気もします。

杉本さんの図で見ると、法勝寺の伽藍配置にしても、毛越寺の伽藍配置にしても、それ以前の興福寺の伽藍などの奈良時代の回廊で囲まれている伽藍配置形式から出発してきていることは間違いないわけで、そこに阿弥陀浄土を象徴した阿弥陀堂と庭園とのアンサンブル形式が融合する形で法勝寺のような伽藍配置や、それに先行して法成寺のような伽藍配置が成立して来るのだと思います。

平泉では、薬師浄土を象徴する形での毛越寺ができたり、あるいは自然の山との一体感をより認知させる形での阿弥陀浄土の世界としての無量光院が成立したりするわけですね。それらの伽藍配置の中にも、先行する奈良時代の伽藍配置の系統が継承され、なおかつ自然の崇拝思想、自然神に対する崇拝思想という信仰形態みたいなものが反映されて、両者が融合する形で無量光院において実現したと言えると思いますし、あるいは、毛越寺の伽藍配置にもそのことが投影されているという点が、平泉が持っている大きな特質なのではないかと思います。

もう1つは、『作庭記』をどのように位置づけるのかということです。中国や朝鮮半島の思想的な影響も当然『作庭記』の中には認められるわけですが、少なくとも作庭の技術書としては、世界でも類を見ないほど古いもので、それとまったく、細部にわたってもコンセプトにおいても照合できる形で毛越寺の庭園が現存しているということ自体、他に類例を見ない顕著な価値を持っているのではないかと思います。

【田中(哲)】 田中淡先生が説明されたように、いろんな風水の思想とか、あるいは『宅経』など経典は当然中国のものを参考にしてつくったということがありました。そういう影響を受けてつくられたのが『作庭記』であると言えます。それから、陰陽五行説や四神思想、鬼門のことなど、いろんな面で中国の影響を受けたのは間違いないと思います。それに基づいて、現実の庭園の中で、特に毛越寺、あるいは、観自在王院でもその一部は言えるのですけども、そういうのが意匠として明確に分かるということは、極めて重要な事実であると思います。それもどのように庭園が伝わってきたかの1つの確証にもなるのだと思います。

【工藤】 それでは、「平泉」を歴史学上どう位置づけることができるかということと、これまでの先生方のご指摘を結びつけるような試みについて、少しお話ししたいと思います。

古くは、平泉のさまざまなお寺などについて、京都から遥か遠くに流れてきてたまたま残っていたものだというような考え方とか、あるいは、奥州藤原氏がひたすら京都に憧れて、京都のいろいろなものを、とにかくはめ込んだのだと、そういう理解が非常に強かったように思います。それを見直すような見解が、歴史学の分野ではあります。奥州藤原氏は、12世紀、約100年間東北地方をほぼ支配した。そういう意味では奥州王でした。これは、京都の中央政権から完全に自立していたというわけではありませんが、一

定程度自立した動きをすることを、京都の中央政権側も容認していたというふうに考えられます。

そういう意味で、中国の歴史の上でいろいろな地域、そして時代に成立した地方政権、しかも都から非常に離れたところに成立した地方政権という意味で、平泉は辺境の地方政権の都であったということになります。中国の場合も同様と思いますが、辺境の地方政権の王は、中央政権の都の中から、その都にふさわしいものを選択的にピックアップして、それを移植するという大きな傾向があったように思います。それは、先生方が指摘されたように、京都で平安時代の11世紀を中心とした時期に見られるような寺院の姿がそのまま平泉に入っているわけではないという観点から理解できるのではないかと思います。

平泉の中心となる中尊寺については、既に先行学説にもそういう考え方があって、京都における延暦寺を意識したものだという説があります。その延暦寺を大きく性格づけている人物に、延暦寺のあり方、天台宗のあり方を大きく規定した慈覚大師がいます。慈覚大師は五台山に巡礼して、そこで見聞してきたものを延暦寺にもたらした。それは仏像であったり、お経であったり、いろいろするわけですが、五台山を１つのモデルにして延暦寺を立派なものにしようとしました。その中には、延暦寺において果たすことができた部分も、果たせなかった部分もあります。その延暦寺におけるそのような考え方が、平泉に非常に強い影響を及ぼしていることが、中尊寺というお寺のあり方そのものに見ることができます。それから、毛越寺にも見ることができます。すなわち、慈覚大師が五台山巡礼の行き帰り、そしてさらに中国山東省から新羅の人たちに多大な便宜を図っていただきながら日本に帰国したという状況の中で、山東省の港に祀ってありました赤山明神、これを日本に持って来て、京都側の延暦寺の登り口のところにそれをお祀りした、それと同じものが、神様の名前こそ少し変わりますが、平泉にももたらされて、実は、現在も毛越寺の常行堂に祀られてあります。それは、まさに、１つの証拠であろうかと思います。

そのように考えてみると、平泉のあり方というのは、中国、特に五台山、そして中国の山東省の一番東の端に当時9世紀にあった新羅の人たちの信仰のあり方というようなものと深い関わり合いがあって、それが京都を経て選択的に平泉にもたらされたというような、そんな視点も参考になるのではないかと思います。

【田中（哲）】 いまのご意見で、選択的移植というのは当然、辺境の地方政権にはあったと思います。庭園についても、浄土の世界の表現の仕方についても、そういうことがあったのではないかと思います。ぜひそれを含めて、明日、取りまとめていきたいと思います。

【平澤】 田中議長、それから先生方、どうもありがとうございました。

長時間にわたり、いろいろな議論をいただきました。明日の議論のために、これらのことを少し整理させていただいて、また明日は、一体どういうところが成果で、どういうところが課題なのかということを確認していくような議論ができればと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

5. 討論－3（5月21日）

■結論文案に関する説明

【平澤】 昨日、一昨日の議論を踏まえ、事務局の方で、議長と相談させていただきながら、この国際研究会の成果に関する整理の文案をご用意させていただきました。この資料にお目通しいただきながら、本日、有意義な議論をいただければ幸いです。

【田中（哲）】 いま事務局からありましたように、昨日までの議論に基づいて、この国際研究会の成果に関する資料を用意しましたので、それに目を通していただきながら、最後の議論を進めたいと思います。まず、この資料について、読み上げさせていただきます。文化庁の本中さんの方からお願いします。

【本中】 ありがとうございます。では、国際研究会の成果について、奈良文化財研究所と文化庁を代表して、ご報告させていただきます。お手元には、仮に英語の文案もご用意していますけれども、これについては参照用としていただき、これからの検討を踏まえて、最終的には電子メールなどで確認していただき、文案を確定したいと思いますので、よろしくお願いいたします。

タイトルは「東アジアにおける理想郷と庭園に関する国際研究会の成果について」ということで、本日付で独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所と文化庁の下に文案をつくってあります。

2009年5月19日から21日の間に、文化財研究所と文化庁の主催のもとに、文化財研究所において、「東アジアにおける理想郷と庭園に関する国際研究会」が開催されたわけです。この研究会では中国、韓国を代表する2名の研究者をはじめ、日本国内から6名の研究者の方、専門家の方を中心として、標記の主題に基づく研究成果の交流と議論が行われました。

この研究会における目的と論点、結論を以下にまとめてあります。

まず、目的ですけれども、3つありました。

目的の1番目は、日本において8世紀から14世紀にかけて造営された仏の浄土世界を表現する庭園。ここではこれを「浄土庭園」というふうに呼んでおりまして、英訳で、Pure Land Gardenというふうに定義づけていますが、この本質を明らかにすること。このような定義でいいかどうかということについて、また英語でこのように呼んでいいかどうかということについても、最後のご意見を賜ればと思います。

目的の2点目は、以上のような庭園を「浄土庭園」と呼ぶことが正しいとするならば、その浄土庭園の系譜を明らかにするために以下の点について明らかにするということでした。1つめには、中国大陸、朝鮮半島、日本列島の各地域において形成された理想郷の思想。2つめは、それらが永遠の理念、意匠、技術に与えた影響。3つめには、各国のそれぞれの庭園における表現上の類似点や相違点、この3点でございました。

目的の3点目は、一群の浄土庭園が現在もなお継承されている「平泉」、これは日本が世界遺産暫定一覧表に記載し、なおかつ今、再推薦の途上にある資産ですけれども、「平泉」が持っている顕著な国際的な価値を結果的に明確化するということでした。

大きくは、以上の3つの目的のもとに、この国際研究会では、3つの主題について、それぞれに論点が設定されたわけです。

主題の1つめは、「人間と自然との関わり」についてでした。その関わりが庭園にどのように表現されてきたのかということです。人と自然との関係を芸術の作品にまで昇華させた東アジアの庭園の成立から発展に至る系譜、あるいはその特質について検討を行い、3つの論点に基づいて議論が行われました。

論点の1は、「庭園文化の基層を成している人と自然との関わり」です。これは各国の一般的な意味での人と自然との

関わりです。論点の２は、それらが庭園文化として伝わり発展していく過程についてです。論点の３は、それらがそれぞれにおいてどのように庭園に表現されたのかということでした。

主題の２つめは、「庭園における池」ということでした。特に浄土庭園においてはそうですが、池が持っている意味というのがとても大きいということから、庭園における池、その池を持ってきた意味についての変遷、形の変遷について議論が行われました。中国と朝鮮半島では、「浄土庭園」の事例が現時点においては確認されていないということが、この国際研究会の結果、ほぼ明らかになったのではないかと思っておりますが、「浄土庭園」が日本において成立した可能性が高いとすれば、その系譜や特質について東アジアの諸国が共通して持っている理想郷を庭園に表現しようとする方法、その中で庭園と池との関係がどのようなものであったのか、このことを検討することによって、以下の３つの点について議論が行われました。

まず、論点の１は、広い観点からの「庭園における池」の問題でした。そして浄土世界を描いた浄土変相図などの図像における宝池の性質をその課題としました。それから、実際の浄土庭園における池と仏堂との関係、この３点についての議論が行われました。

主題の３つめですが、そのような「理想郷と庭園との関係」ということでした。これは東アジアのどの地域においても理想郷としての庭園にさまざまな自然の姿が表現されてきたわけですが、そこに見る共通する性質と多様な方法、姿、性質、そういったものについての議論が行われました。

東アジアにおけるその理想郷と庭園との関係を包括的に検討して、特にここでは「平泉」に残されている一群の浄土庭園が持っている顕著な普遍的価値について明らかにするために、論点３つが設定されて議論が行われました。これは１番めと２番めの主題にも関係しますけれども、東アジアにおける理想郷の表現としての庭園の観点からの平泉へのアプローチ。そして、日本に展開した浄土庭園の独自性と希少性の観点からの平泉へのアプローチ。それから３点目には、結論的に東アジアの庭園文化史上における平泉の一群の浄土庭園の代表的、あるいは典型的な性質について議論が行われました。

以上の目的と論点に基づいて、結論です。読み上げさせていただきます。

中国、韓国、日本の３つの国には、東アジア地域に独特の自然と人間との関係を表す庭園文化がはぐくまれ、それらを反映して形成された多くの歴史的庭園が現存する。各国、各地域の庭園には作庭の理念、意匠、技術の各側面において、共通する性質が認められる反面、おのおのの歴史的、文化的背景に基づく固有の性質も認められる。

その中でも最大の共通点は、庭園が仏教、神仙思想、陰陽五行説などのさまざまな思想、理念に基づき、自然を警護し、自然になじみ、自然の姿を写しとることを目的に、現世における理想郷をあらわそうとして創造されたことである。庭園は、中国から朝鮮半島、及び日本へと作庭思想が伝わる過程で、おのおのの地域に固有の自然観とも融合しつつ独自の発展過程を経て、各国に固有の庭園文化として定着した結果、形成された文化的な資産である。特に日本の場合には、中国及び朝鮮半島から日本へと伝わった作庭思想が、日本に固有の自然崇拝の信仰形態、自然観とも融合しつつ、中国、朝鮮半島とは異なる独自の庭園文化とそれをあらわす庭園が形成された。

その中でも特筆すべきは、仏の浄土世界を理想郷とみなし、それを具念する独特の「浄土庭園」の様式が含まれていることである。それらの顕著な価値を正当に評価するためには、以下の点について十分考慮することが必要である。

１点目、現時点では中国及び朝鮮半島において、浄土庭園の実例は確認されていないということ。

２点目、これに対して、中国大陸及び朝鮮半島から人と自然との関わりにより創造された庭園の理念、意匠、技術が、仏教及び神仙思想とともに日本にもたらされ、日本に固有

の自然崇拝の信仰形態、自然観とも融合発展する過程で、世界の他の地域に類例を見ない「浄土庭園」の様式が確立したこと。

3点目、平等院庭園を含む数々の浄土庭園の中でも平泉の一群の浄土庭園は、2点目において述べた日本庭園の発展過程における最も典型的、代表的な浄土庭園の事例であり、他に類例を見ない傑出した資産であるということから、以下の3点に基づき顕著な普遍的価値を持つ可能性が極めて高いこと。

1番、浄土世界を象徴的に表現した仏堂、庭園群と、それらの考古学的遺跡は6世紀から12世紀に中国大陸及び朝鮮半島から、日本列島の最東端へと進んだ、建築庭園の意匠、設計に関する人類の価値観の重要な交流の到達点を示している。

2番、浄土世界を象徴的に再現しようとした優秀な芸術作品であり、それらの考古学的遺跡をも含め、建築、庭園の分野における人類の歴史の重要な段階を示す傑出した類型である。

3点目、平泉において一群の浄土庭園が完成する上で重要な意義を持ったのは、複合的性質を持つ日本独特の仏教思想である。それは世界的な思想体系である仏教思想が6世紀から12世紀に日本列島の最東端へと到達する過程で、法華経、密教、浄土教のみならず日本古来の神道を含む自然崇拝思想とも融合し、地上に現存するものも地下に遺存する考古学的遺跡をも含め、浄土世界を体現した庭園群の意匠・形態へと直接的に反映されたものとして、顕著な普遍的意義を持つ。

以上が結論の文案です。議論はかなり多岐にわたって、そして本来結論として盛り込まなければいけない事柄は詳細にわたるかと思いますが、おおむね要約すれば以上のようなことになるのではないかと考えます。足りない点、それから表現のあり方で具合の悪い点がありましたらご指摘いただければと思います。

最後に、主な参加者として、2名の中国そして韓国からおいでになった呂先生と洪先生。そして6名の研究者、それから2名のプレゼンテーションしてくださった研究者、この合計10人の方のお名前を主な参加者として示しました。

■結論に関する議論

【田中(哲)】 いま、本中さんのほうから、この研究会の目的・論点・結論についてご説明がありましたが、特に「浄土庭園」の定義、英語表現を含めたその定義をはじめとして、どうぞご忌憚ない意見をいただければと思います。

【洪】 幾つか申し上げたいと思います。「浄土庭園」の定義については、この2日間の議論を通じて、ある程度の合意というものがなされていると思います。また、日本に遺る「浄土庭園」は非常に特殊であり、またその希少性も極めて高いと思います。

しかし、浄土庭園というのは、仏教文化を持つ国家では、どこでも表現される可能性があるのではないかと思っています。韓国でも浄土信仰というのは非常に流行したことがありますし、今でも多くの人々が浄土信仰を崇拝しています。ですから、韓国では韓国独自の浄土信仰を表現した庭園というものが当然あり得ます。その1つの例が、私がご紹介した仏国寺の九品蓮池です。韓国の場合も浄土庭園がある可能性がありますし、日本にもあり得るということです。しかし、そのデザインや形式が同じではないということです。

結論を申し上げますと、日本で言う「浄土庭園」というのは日本にしかないと思いますし、特異性、そして希少性があるのだと思います。

そうした点から見ますと、結論の部分で、「現時点では中国及び朝鮮半島において浄土庭園の実例は確認されていないこと」と記載されていますけれども、朝鮮半島でも朝鮮半島独自の浄土庭園というものがあり得ると思いますので、こういった部分をより明らかに規定したほうがいいのではないかと思います。

例えば、「現時点では、日本で形成された『浄土庭園』のような実例は、中国と朝鮮半島では確認されていない」としてはいかがでしょうか。そうすることで平泉の庭園遺構 といったものをより明らかに表現しながらも、韓国と中国にもそ

の可能性があるということを示すことができる表現になると思います。

そういった日本の形式は日本の自然観、そして文化を反映しているものである。それはもちろん、韓国でも中国でも発見することができないわけですね。よって、その結論のところに記載された部分を、「日本で形成された浄土庭園」というふうにはっきりと表現することで、最終的なサマリーにおいてより明言できるのではないかと思います。

次に２つ目ですが、これは少し微妙なことですけれども、日本語のことを分からないので申し上げたいと思います。韓国では「朝鮮半島」とは言わずに「韓半島」という表現を使います。もし問題がなければ「韓半島」という記録を残していただけないでしょうか。

最後にもう１つ、これは英語を少しよく分からなくて指摘する部分になるかも知れませんが、「浄土」について“Pure Land”という表現を使うのは、一般的なのかどうかについて、少し判断が難しいところだとも感じます。「浄土」という言葉についてもう少しほかの表現がないのか、更に少し考えてみる必要があるのではないかと思います。

【田中（哲）】 幾つかのご指摘がございました。まず結論冒頭のところです。韓国にも当然浄土信仰があって、それに基づく浄土寺院の庭園というのがあるということ。仏国寺の九品蓮池などが実例としてあるということで、そういう意味で、この部分の書き方については、「日本で形成された浄土庭園のような」ということに限定して、それが中国及び朝鮮半島では確認されないという整理がひとつありました。

これは後で呂先生のほうからご意見をお伺いしたいと思います。系譜」ということを考えているので、韓国では浄土式寺院の庭園としてまだ完全に解明されてないのですけれども、九品蓮池のような遺構も確認されているという整理もあると思います。

【洪】 それでよいと思います。先ほど田中議長がご指摘されたように、中国や韓国でも表現方法は違っても、浄土庭園をつくるというのはあると考えます。ですから、先ほどおっしゃったことも同時に表現する方法で、「日本で形成されたようなものの実例は、韓国また中国では発見されていない」という表現がよいと思います。また、韓国の九品蓮池が浄土の庭園としても表現された実例であるというふうに記載されても、それはいいと思います。

ただし、その中でも、日本で形成された「浄土庭園」というのは大変特異なものですので、それをより際立たせるために表現する方法もあるのではないかと思いました。

【田中（哲）】 最初の問題は、中国でも韓国でも浄土寺院を中心とする庭園は存在したと考えられるということですね。それが日本で形成されたような状態とは違うということで、そういう表現の仕方に変えたほうがようということです。その点はいかがでしょう。

【本中】 例えば、「韓国の九品蓮池のような事例は確認されてはいるが、仏堂と園池の組み合わせにより多様な仏国土を表現した多くの浄土庭園の実例は、日本以外の東アジアにおいて確認されてはいない。」という言い方はいかがでしょう。

【洪】 とてもよい表現だと思います。韓国の九品蓮池は、その寺刹と池との関係に、鮮明な形で表れています。九品蓮池の場合、そこに橋があったのかどうかというのは、完全に明らかにされてはおりませんが、その九品蓮池を通り過ぎると、七宝橋と蓮華橋の階段を昇って、極楽殿というところに上がるようになっています。

それで本中先生がおっしゃったように、韓国の九品蓮池は浄土思想、浄土庭園の１つの表現方法ではある。しかし、一部、その寺刹と池との関連性はないというふうにおっしゃったように私には聞こえたのですが、もしそうであれば、それは違うように思います。

【本中】 その点について、訂正したいと思います。「仏堂と園池を組み合わせることによって、浄土世界を表現した韓国の九品蓮池のような事例は確認されてはいるが、多くの仏の多様な仏国土を表現した一群の浄土庭園の事例は、日本以外の東アジアにおいて確認されていない。」というよう

にしてはいかがでしょう。

【洪】 結構だと思います。

【小野】 本中先生が今、多様な仏国土ということで、いわゆる阿弥陀浄土だけではないということを組み込んだのだろうと思いますけれども、浄土本来の形から言うと、やはりその阿弥陀の極楽浄土というものがベースにあるのだと思います。そこでほかの浄土も含み込むような形でその後展開したということは否定しませんけれども、あえてそこで「多様な」ということで、ほかの仏の浄土というものを強調するような言い方は、私には少し抵抗があるのですが、いかがでしょうか。

【本中】 具体的に文章にすれば、どうなるのでしょうか。

【小野】 「多様な」というところを取ってしまうということです。

【田中(哲)】 「仏国土」だけにするわけですか。

【小野】 あるいはその本来の阿弥陀浄土を踏まえて、「極楽浄土をはじめとする」ということを入れるのではいかがでしょう。

【田中(哲)】 しかし、これまでの議論からすると、あまり阿弥陀だけにこだわる話ではないという方向だったので、そこは多様性を表現に組み込んだ方がよいのではないですか。

【小野】 整理の仕方の違いだと思います。「浄土庭園」という言葉が含む内容については、日本の国内でも曖昧なのではないかという批判があるわけですね。そこで、要は、仏堂と園池だけあったら、それで「浄土庭園」と言ってよいのか、ということがあります。あくまでも「浄土」という言葉を使うのであれば、極楽の阿弥陀浄土ということを中心に考える必要があるのではないか。例えば建築史の専門家からも指摘があるそうですから、その辺りもやはり考慮しておいたほうがいいのではないか、というのが私の考えです。

【仲】 今、本中先生が修正されたところは、仏堂と園池が一体化したというところで、これは、韓国の九品蓮池も仏殿と一体化しているという反論があったからだと思うのですけれども、「一体化」という意味は、仏殿のすぐ前面にということで、日本の場合は隣接しているということだと思います。考え方の整理の中に、韓国においても池はある けれども、日本のようにすぐ前面にあるというスタイルではないということを含んではいかがでしょうか。仏殿のすぐ前に園池を設けるスタイルは見られない、ということでも

よろしいのではないかと思いました。

もう1点、日本で言うところの「浄土庭園」の大きな特徴は、仏殿と園池の一体化だけではなくて、それにプラスして、本中先生からご指摘あったように、背面の山あるいは手前の河川、つまりそういった自然地形としての山、川も構成用途としてみなすところに大きな特徴があります。そのスタイルが平泉で完成されているという意味で「平泉」を適格と考えられると思います。つまり、仏殿の前面に池を開き、さらに背後に山、前面の河川と一体となって浄土の表現をとっている、そういうところに日本の浄土庭園の特徴があると言ってもよいのではないかと思いましたが、いかがでしょうか。

【田中(哲)】 今少し議論が混ざってしまっていると思います。ここでは九品蓮池の例も挙げて、仏堂と園池が組み合わされた仏国土を象徴しているという話ですから、別に堂前の園池とか、境内にある園池とかと区別せずに説明しているわけですね。ですから、「多くの仏国土」とか、「仏国土」という表現でも十分問題なのではないかと思います。

この部分は中国での話も関わってくるので、先にこの部分だけに限って呂先生からも少し、中国での状況というのをご説明いただけると幸いです。

【呂】 まず、この「浄土庭園」についての定義ということで、そこから申し上げたいと思います。この国際研究会の中で、皆さんとともに議論してきた中で、その「浄土庭園」というのは何かということでありますけど、これは自然と人、自然の中の水、そして池、島、伽藍、橋というも のが入っているものであると思います。

そういう点から申しますと、そういうもので定義をされた浄土庭園ということについていえば、中国にしても韓国にしても無いわけです。

それから、若干の幾つかのその浄土庭園の間の特徴、共通している特徴ということも『吾妻鏡』に書かれているとおりです。

そういうふうに書くと、もっと表現がはっきりするのではないかと思います。

それからまた、自然を表すという形ですけど、日本のほうはその自然の曲線を持っている、そして、方地ではないということですね。

平泉の浄土庭園については、私が現地に臨んだときに、形態について、確かな印象というのがあまり残らなかったことがあります。前のほうに池があって、そして後ろのほうに山があるという情景でしたけれども、もう少し詳しく説明して書かれたほうが、その代表性あるいは特異性を明らかにできるのではないかと思います。

【田中(哲)】 今、浄土庭園の定義と、それから日本のその浄土庭園の特異性についてご意見いただきました。定義のところで確認したいのですが、自然と人の関係があって、意匠として池、島、それから仏堂・仏殿、それから橋が使われるということがある、それが日本の「浄土庭園」の特色だということでよろしいでしょうか。

【呂】 私が強調したほうがよいと言ったのは、いわゆる「平泉」に見られる独特の価値、特異性、それをもう少し詳しく書かれたほうがいいのではないかということです。

【本中】 今即座にここで完成された修文を申し上げるわけにはいかないと思いますので、呂先生と洪先生とお二人からいただいたご意見を踏まえて、また仲先生や小野先生からいただいた指摘事項も踏まえて、日本の浄土庭園の定義ということをもう少し具体的に書き込む作業をしていきたいと思います。それで、そのような事例は、韓国では九品蓮池に確認されてはいるけれども、阿弥陀の西方極楽浄土の世界を表現した庭園をはじめ、多様な仏国土を表現した一群の浄土をあらわす庭園が残されている事例は、東アジアのどこにも見られない、というような言い方をしたいと思います。

【洪】 先ほど申し上げましたけれども、九品蓮池にも蓮池があるわけですね。そしてその次に阿弥陀世界を象徴する七宝橋があって、そして蓮華橋というものがあります。これも阿弥陀世界を象徴しているものですね。そしてその先に行くと安養門があり、それは極楽浄土に入っていく門になるわけですが、そこを通るとその次に極楽殿があります。こういった流れを見ると、一連の浄土世界を表現しているひとつの文脈の流れが見えると思います。それはやはり韓国的なものであり、「平泉」はやはり日本的なものだと思うわけです。ですから、日本的な「浄土庭園」は、東アジアのどこでも見つかっていないと思います。

【田中(哲)】 分かりました。あと、用語の使い方で、朝鮮半島、中国大陸という表現が有りますが、これは、「大陸」とか「半島」とかいうのをつけずに、中国と韓国という言葉を基本として整理し直せばよいと思いますが、そのような整理でよろしいでしょうか。

【洪】 結構です。

【本中】 英語では、Korean Peninsulaという表現でよいですか。

【洪】 結構です。

【田中(哲)】 それから、もう1つの質問は、浄土の英語訳はPure Landでいいかどうかということですが、洪先生には何か良い表現がおありでしょうか。

【洪】 私は、欧米の方たちによくそれを理解していただけるような表現があればよいなと思っているわけです。先ほど小野先生からの発言で、浄土世界が阿弥陀浄土をはじめとしているということがありましたけれども、ならばPure Landではなくて、Amida Landにしたらどうかなと思います。ここにいらっしゃる皆様が、Pure Landでいいとおっしゃるのであれば、何としてでも反対するというわけではないのですけれども、よりよく表現するような何か言葉を考えてはいかがかと思います。

【小野】 私も基本的にはPure Landでよいと思っています。「浄土」は、本中先生がかねてからご指摘されてきたように、10の仏国土があるというふうな話で、すべてが、Pure Landだと思います。だから、もしあえて阿弥陀浄土と言うので

あればPure Land of Amitabhaとか、そういうふうな言い方になるのだと思います。

日本の「浄土庭園」の場合、私の考えではベースが極楽浄土の阿弥陀浄土ですけれども、ただ多様な展開をするという中で、わざわざof Amitabhaという言葉をつけてしまうのは限定的過ぎるのではないかという気がしています。そういう意味で、例えば、Pure Landというか表現などが妥当ではないかと思います。

【呂】 仏教界のほうで、何か特別な英語の言い方というのはあるでしょうか。やはりこれは宗教と関係してまいりますから、確認することは重要だと思います。

【洪】 私も同意見です。その仏教関係の用語として、英語的な解釈、英語的な表現はどのような形なのかということについて、その分野の方に聞くのもよいのではないでしょうか。

【田中(哲)】 ぜひ検討したいと思います。

【田中(淡)】 「目的」の部分について、今までご意見が出ているように実際的な庭園様式を示す言葉がここに入らないと、これでは日本の「浄土庭園」は表現していないと思います。庭の形を示す言葉で示して、それを日本では「浄土庭園」と言うということを明確に書いてしまわないといけないと思います。

しかも英語表現のWorld of Pure Land Buddhismというのは、これはこのままだと「浄土教世界」となりますね。ですから、日本語が表現するところと違っております。「仏の浄土世界」という言い方は、日本語としても非常に落ち着かないと思います。また、英語表現のほうは、the "World of Pure Land Buddhism"ということで、ここでは「The」を入れているわけですね。トータルで「Pure Land Buddhism」だったら「浄土教世界」とすれば意味は通じますけども、それと日本語表現とは少し合っていないので、どちらの意味で使うのかを、もう少し考えたほうがよいと思います。

また、併せて、先ほど洪光杓先生が言われたように、「浄土庭園」という言葉自体に、「日本における」ということが明確に分かるような書き方にしていくほうがよいと思います。なるべく括弧やクォーテーションマークをつけるなどすることは最低限必要ですけれど、そのときに"Pure Land Garden"というのは英語としては意味を成さないのではないでしょうか。例えば、"Pure Land Style Garden"とかにするのが、私はよいと思います。"Pure Land"というタームを使

うのは構わないと思います。しかし、ひとつの庭園様式ということで"Pure Land Garden"という言葉にするとなると、これは英語のネイティブの人に聞いてみないと分かりませんが、多分意味を成さない英語だと思われます。そのほうが少なくとも誤解を招かないと思います。

【田中(哲)】 ひとつは最初に示された目的の中の定義に関することで、「仏の浄土世界を表現する庭園」というのでは、あまり具体的ではないので分かりにくいので、もう少し浄土庭園に特徴ある意匠などを表現したらどうかということでした。

それから、英語の表現で"Pure Land Style Garden"というほうがよいのではないかということでしたが、その点はいかがでしょう。

【本中】 ただいまの点については再度検討したいと思いますが、実は"Pure Land Garden"という言葉は、世界遺産の推薦登録の検討において、もう既にひとり歩きしているところがあるので、現在、その言葉について欧米人の間でどのようにコンセンサスを得ているのかを踏まえつつ、検討してみたいと思います。

【田中(淡)】 しつこくケチをつけるわけではないのですけど、"Pure Land Style Garden"だったら、その意味するところは通じると思います。ひとり歩きしているかもしれないということであれば、例えば"Pure Land Garden"をフランス語ではどのように表現されるかというときに、"Jardin Amitabha"ということなら分かると思います。それからドイツ語でも"Amitabha Garten"とかになったら通じるかも知れない。つまり、「阿弥陀の庭園」とかというように理解されると思う。しかし、"Pure Land Garden"では、何を意味しているのか分からないと思います。とにかく、ここで議論

しても結論は出ないので、ネイティブの人にチェックしてもらうのが一番よいと思います。

【小野】 かなり先の部分に飛んでしまうのですけれども、最後の項目のところで、「法華経、密教、浄土教のみならず」ということで、3つ並列してあります。法華経というお経、それから密教という現世利益を目的とする仏教のあり方、それと、浄土教といういわば浄土三部経を中心とする考え方。これらオーダーが違う3つのものが並列するのは少し変な感じがします。この辺は誤解が生じないような表現にしていく必要があろうかと感じています。

【田中(哲)】 並列の用語が同次元でないのではないかということについて、後で確認したいと思います。

【本中】 ひとつ全体的なことについて確認させていただければと思います。我々としては、このエキスパートミーティングの成果について、奈良文化財研究所で調査研究書としてまとめ、それを全部、附属資料(Appendix)という形で「平泉」の推薦書に添付していきたいと考えています。

そのときに、今の浄土庭園の定義の問題、それからさまざまに指摘された部分を全部その文章の中に反映をさせるということを前提にして、この文章もその附属資料(Appendix)に含めていきたいと考えていますが、そのことについてはいかがでしょうか。

【田中(哲)】 それでよろしいでしょうか。では、了解していただけるということで、ありがとうございます。さらに、ほかに訂正すべき箇所等について、いかがでしょう。

【仲】 少し英語の表現が問題なのでよく分からないのですが、日本語のほうでは「平泉の一群の浄土庭園、最も典型的、代表的な」ということなのですけども、英語表現のほうでは

“exceptional”ということになっていて、これには「例外的な」という意味はあったかと思うのですけれども、ここでは「特異的な」ということで使っているのでしょうか。

【本中】 これは日本語と英語と確かに一致していないのですが、「典型的」と「代表的」というのは非常に似通っている言葉なので、exceptionalityではなく、representativityということで表現しています。そこにexceptionalityをつけ加えています。ですから、この部分の日本語と英語とは、逐語的には一致していないです。exceptionalは「比類のない」という意味で使っています。

【仲】 ほかにある日本の浄土庭園から傑出したというか、ある独特の特徴を持っているということをここで表現しようということですね。

【本中】 そうです。outstanding representative exampleということです。いずれにしても、これは日本人がつくった英語ですから、確認させていただきたいと思います。

【田中(淡)】 少し拘りたいと思う点があります。洪光杓先生からご指摘のあった「韓半島」ということと関連するようなことで、英語の表現で、例えば「中国大陸」は、このままだと“Chinese Main Land”となっていますね。これは、まず、“Main Land China”とすべきところですけど、問題は、そういう表現を採用するのではなくて、例えば、China, Korea and Japanとか、それだけではいけませんか。

【洪】 問題無いと思います。

【田中(哲)】 「朝鮮半島」と「韓半島」については、「半島」を付けるので、さまざまな配慮から、用語の選択が難しくなるので、それを外そうという方向で考えています。

【田中(淡)】 “Main Land China”というと何か非常に政治的な意味になって、台湾は除外しているという意味が表現されてしまうと思うので、Chinaだけでよいと思います。

【田中(哲)】 国の名前で統一したいと思います。

ほかには、よろしいでしょうか。

今幾つかご意見いただいたことを踏まえて修正を加えることにして、先生方には、また電子メールなど何かで確認をとると思いますので、よろしくお願いします。

それでは、この国際研究会の結論文案については、若干訂正確認の必要がありますが、この形での取りまとめを行っていくことについては合意されたものといたします。

■最終コメント

【田中(哲)】 以上で、この会議は終わることになるわけですけれども、最後にラウンドテーブルの各先生方から、今回の国際研究会について、何か一言ずつコメントがいただければと思います。田中淡先生から順番にお願いします。

【田中(淡)】 とても密度の濃い話がたくさん聞けたので、非常に効率的で、成功だったと思います。

【呂】 奈良文化財研究所の皆様、また文化庁の皆様にお礼を申し上げたいと思います。今回の会議に出席をさせていただきまして、日本、中国、韓国の8世紀から14世紀に至る庭園に対して、非常に理解が深まったと思います。ありがとうございました。

【洪】 今回の会議を通じて、東アジアの庭園について深く検討することができました。こうした機会を持てたことは、非常に喜ばしいことだと思います。東アジアの庭園を形成したその基本にあるもの、すなわち、自然への憧れ、そして自然への愛というものが共通して見られたというのが、皆の意見だと思います。このたびの会議の準備のためにご苦労なさいました、奈良文化財研究所の皆様に感謝を申し上げます。ありがとうございました。

【仲】 私はコメンテーターということで参加させていただきました。大変有意義な会議で、お招きいただきましたことにまず感謝を申し上げたいと思います。それから諸先生方の非常に精緻な論考、それから深いお考えに触れることができて非常に感銘を受けました。

浄土庭園というものを中心として、広く理想郷という大きなテーマを掲げられていたということが非常に興味深いことで、今回は、東アジア3国の中での理想郷においての議論でしたけれども、洪先生がレジュメで触れられている西洋のパラダイスであるとか、西洋文化あるいはさらに広く世界全体の中で人類が求めた理想郷ということについて、さらに検討が広く発展していければと思っております。どうもありがとうございました。

【小野】 洪先生あるいは仲先生のお話にもあったように、東アジアという枠組みで浄土庭園というのを1つのテーマにしてこういう会議を持てたことは、大変意義深いことであったかと思います。私どもの研究所は考古学が中心的な課題のひとつで、考古学のほうでは中国あるいは韓国と協力していろいろなプロジェクトを進めております。呂先生、それから洪先生には今後ともいろいろとお世話になるかと思いますけども、何とぞよろしくお願いいたします。それからラウンドテーブルの先生方並びにご参会者の皆様にも、お礼を申し上げたいと思います。ありがとうございました。

【本中】 まず、呂先生と洪先生にお礼を申し上げたいと思います。ありがとうございました。

ご参会いただいた先生方、そして各地からご参加いただいた研究者、専門家の先生方、また奈文研の専門家の方々、ほんとうに心からお礼を申し上げたいと思います。

もっと早くにこのような国際研究会を開いて、平泉の推薦書を作成していく作業に反映させるプロセスが必要であったなと痛感いたしました。役所の中にいる専門家、研究者として多くの専門家の知識を1つにまとめながら推薦書を作成していくという、そのプロセスの重要さを改めて感じた次第です。これからも様々な観点でご支援とご助言を賜りますように心からお願い申し上げます。ありがとうございました。

【田中(哲)】 呂先生、洪先生、どうもありがとうございました。私があまり頼りない座長なので、うまくまとめられたかどうかについて分かりませんが、多分、ほかの先生方や会場にお見えの各分野の専門の先生方のおかげで何とか結論が得られたと思います。

私の立場は、1つは平泉の推薦書作成委員になっていますので、本中さんと同じような立場でありますし、それから最初に小野部長が説明されたように、今回の国際研究会が一連となっているこの「古代庭園研究会」にもずっと参加してきました。これまで時代を順番に追って、もう8年間取り組まれてきたもので、日本の庭園史を追っていく段階で、現在、平安時代に取り組んでいます。だから、奈良文化財研究所として、浄土庭園とはどういうものかという検討においても、「古代庭園研究会」の重要な要素であったわけです。つまり、「平泉」にも「古代庭園研究会」にも大いに成果が得られたのではないかと思います。これもひとえに皆様方のご努力とご協力の賜物だと思います。ほんとうに、どうもありがとうございました。

註) 5月21日(木)の討論－3において、円卓メンバーの尼崎博正氏は、公務の都合により欠席された。

6. 閉会(5月21日)

【平澤】 田中哲雄議長、それから先生方、皆様、どうもありがとうございました。

【小野】 改めまして、奈良文化財研究所を代表して、閉会のご挨拶を申し上げます。

田中哲雄先生からもお話がありましたように、私どもの研究所といたしまして、「古代庭園研究会」の取組をはじめてから、古墳時代以前から飛鳥時代、奈良時代、そして平安時代と検討を進めてきまして、今年で9年目になります。最近、奈良文化財研究所も独立行政法人ということになり、5年ごとにまとまりある成果を見せていかなければならないという中で、今年は4年目というかなり厳しい年に当たっているところですが、その中でもこの国際研究会を無事開催することができ、また、大変豊かな成果を得ることができた、その面でも大変感謝をしているところであります。

この会議は、文化庁とも共催させていただき、それから大変お忙しいなか、呂先生、洪先生、さらに国内の田中哲雄先生、田中淡先生、それから尼崎先生、仲先生にもおいでいただき、さらに岩手県の佐藤さんあるいは宇治市の杉本さんにもおいでいただき、非常に豊かな研究会になったと思います。当然のことですが、この有意義な成果については、私どもの研究所だけの成果とするのではなくて、こうした参加者全員の成果であるという形で広報をしていきたいと思っております。

ほんとうに3日間、かなりタイトなスケジュールでありましたけれども、皆様のご協力のおかげさまで、無事に終えることができました。改めてお礼を申し上げます。どうもありがとうございました。

【平澤】 皆さま、ありがとうございました。

私ども事務局では、この3日間この会議の裏方で準備を進めてまいりまして、内容が非常に豊かなであったので、時間が収まるというところが非常に心配でした。

ところが開いてみれば、1日目から立て板に水を流すようにさっと非常にスムーズにまいりまして、議論も非常に集約的に、かつ、一番本質的な、深いところをご議論いただけたかと思います。

さて、この「東アジアにおける理想郷と庭園に関する国際研究会」の成果につきましては、最終的な報告書のとりまとめを予定しております。内容につきましては夏頃を目途に、また印刷物としては秋頃にはきちんとしたものとして印刷をしたいと考えております。

このたび、ご報告、ご講演でお世話になりました先生方におかれましては、引き続き電子メールなどでご連絡申し上げますので、またよろしくご協力お願いいたします。

改めまして、皆さま、大変長時間にわたり、まことにありがとうございました。この国際研究会の有意義な成果、そして皆様のご協力に深く感謝申し上げます。

これをもちまして「東アジアにおける理想郷と庭園に関する国際研究会」を終了いたします。

— 了 —